

VIEW21

ビュー21

2019

Vol. 3

教育委員会版

特集

シリーズ ● 学校現場と進めるカリキュラム・マネジメント

子どもがかかわり、子どもに還る 学習評価

座談会 研究者、教育委員会、学校長が学習評価を語る

学校事例 京都府 京都市立高倉小学校
大阪府 寝屋川市立石津小学校
神奈川県 横浜市立白幡小学校

指導のヒント 「自ら学ぶ力」を育む授業

連載

教育長が語る **Leader's VIEW**
熊本県宇城市

教育施策で導くわがまちの未来
島根県益田市

創造的働き方改革のすすめ
—実践の第一歩—

学校事務職員との連携 長野県塩尻市

データで教育を読む **Benesse Report**
主体的・対話的で深い学びの可能性

変化を恐れず教育を前進させ続け、 人生を築くデザイン力を育む

熊本県 ^{うま}宇城市教育委員会 教育長 **平岡和徳**

熊本県宇城市は、2019年7月、ベネッセと包括連携協定を結び、ICT教育や英語教育等の充実を図っています。高校サッカー界の名将として活躍しながら教育行政に身を投じた平岡和徳教育長に、故郷の人づくりに懸ける思いを聞きました。

ひらおか・かずのり 前職の熊本県立大津高校教諭時代は、サッカー部を全国大会の常連校に育て、約50人のプロサッカー選手を輩出。2017年度から現職。

24時間をデザインする力が 自らの人生を築く力になる

私は、故郷である本市の教育長を拝命するまで県立高校の教員としてサッカー部の監督を務め、スポーツを通じた人づくりに尽力してきました。その指導で大切にしてきたのは、24時間をデザインする力を生徒に育むことです。まず、部活動の練習時間は1日100分間とし、居残り練習を禁止しました。限られた時間内で何をすべきか生徒が自ら考え、行動できるようにすることがねらいです。さらに、食事や睡眠のための時間や、学習したり家族と過ごしたりする時間を確保する目的もありました。

100分間としたのは、サッカーの試合が90分間だからです。試合と同程度の時間、毎回全力で練習すれば、試合でも集中力を維持できるようになります。また、試合では、アディショナルタイム*にゴールが決まって勝つことも珍しくありません。練習で残り5分、3分と追い込みながらやり切ることで、試合でも最後まで諦めない心が磨かれていきます。

そうした練習を積み重ねていけば、

普段の生活でも自分なりの目標を持ち、達成に向けて時間の使い方を考え、諦めずに努力するようになりま

学校・家庭・地域の連携で、 夢を目指す子どもを支える

24時間をデザインする力を育成する上でポイントとなるのは、夢の存在です。夢があってこそ進むべき道を見だし、自分の夢だからこそ夢中になって取り組みます。そこで、子どもができるだけ多くの「本物」に触れられるよう、本市では国際大会の誘致、著名人の講演やコンサートの開催等に力を入れています。本物が放つオーラは子どもを引きつけ、「あの人のようになりたい」という憧れが夢につながっていきます。

そして、子どもが自ら夢に向かって進むために、環境を整え、可能性の幅を広げる支援をしていくことこそ、教育の役割だと考えています。ここで重要となるのが、学校・地域・家庭の連携です。教育の流れをつく

る源泉は家庭にあります。家庭で補えない部分は学校や地域という社会システムが育てていくからです。

本市では、2017年度から全中学校区に小中一貫教育を導入し、学校が主体的に学校運営協議会を設置する「熊本版コミュニティ・スクール」と一体的に進めています。各小・中学校に小中一貫教育コーディネーター担当者を配置し、小・中学校・地域・保護者が目標を共有し、協力して教育を推進する体制を整えました。本市には、地域との会合を50年以上続けている小学校もあり、地域と学校が連携する風土が根づいています。本制度を機に、地域の特色に応じた学校づくりがより推進されることを期待しています。

タブレット端末を活用し、 子どもや家庭との信頼関係を築く

子どもが自ら学びをデザインできるようにするため、ICT教育にも力を入れています。中学校には1人1台のタブレット端末を既に導入し、今後、小学校にも段階的に配備する計画です。学習支援ソフトウェアを導入し、ICT支援員が各小・中学校を

* サッカーの専門用語。試合の前・後半それぞれの規定時間の後に追加される時間のことで、競技者の交代、負傷者の搬出などにより空費された時間を加算する。



定期的に訪問して、ICT機器の活用や教員の教材作成を支援する体制も整えました。

ICT機器は、子どもの主体的・対話的で深い学びを目指す教員の授業改善を支援するほか、子どもと教員の信頼関係を築くツールにもなると考えています。例えば、教員は机間指導などで子どもの状態を把握しますが、その内容は指導経験による部分もありました。タブレット端末があれば、子どもが書いた内容は教員用端末にすぐに表示され、どの教員も子どもの状態を見逃さずに把握できます。教員から適切な支援を受けられれば、子どもは「先生がいつも見てくれている」という安心感を持てるでしょう。さらに、タブレット端末を家庭に持ち帰れるようにすれば、教員は家庭学習の様子をより詳細に把握できるので、家庭と直接つながるツールとしても活用できます。

英語教育も力を入れていることの1つです。本市では、2006年度に国際理解教育特区（現教育課程特例校）の指定を受け、英語によるコミュニケーションを学ぶ「英会話科」を小学1年生から設けています。その成果の可視化と、新学習指導要領での英語4技能のさらなる重視を踏まえ、スコア型英語4技能検定を小学5年生～中学3年生が受検することになりました。5年間継続して受検することにより、子どもは自身の成長を実感できますし、小中一貫教育でも小・中が連携した英語の授業改善に生かれます。いずれの事業もベネッセとの包括連携協定の下で推進し、本市の教育の流れを変える大きなポイントにしたいと考えています。

変化の先に進化がある 大切なのは学び続けること

子どもを支える教員が疲弊しない

ことも重要です。本市でも働き方改革を進めており、長期休業中の学校閉庁日や週1回の定時退勤日、部活動の休養日の設定、統合型校務支援システムの全校整備等を実施しています。それらを活用し、教員が目標達成に向けて24時間をデザインする姿が、子どもの手本になると考えています。

「今まで通り」は後退であり、進化は変化の先にあります。よりよい未来を築くためには、「今」を変えることが必要です。サッカーのフランス代表チームの元監督は、「学ぶことをやめたら、教えることもやめなければならない」と言いました。私も、全国の先進校や有識者から様々な話を聞き、本市で活用できる情報を自分のフィルターを通して伝えるよう心がけています。私たちは子どもの未来にかかわっている。教員も地域も保護者もその自覚を持って子どもを育てよう、これからも施策を推進していきます。

熊本市宇城市 プロフィール



◎ 2005年、5つの町が合併して誕生。九州のほぼ中心に位置するため、熊本市や九州各地へのアクセスがよいという都市機能を持ちつつ、田園風景と自然景観にも恵まれる。世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の1つである三角西港を有する。人口 約5万9,000人 面積 約189km² 市立学校数 小学校13校、中学校5校 児童・生徒数 約4,700人 電話 0964-32-1111 (代表) URL <https://www.city.uki.kumamoto.jp/q/list/114.html>

3 特集

シリーズ ● 学校現場と進めるカリキュラム・マネジメント

子どもがかかわり、子どもに還る **学習評価**

4 要点整理

新学習指導要領における学習評価の基本的な考え方

6 座談会

目標・指導・評価の一体化を図り、未来の学習につながる評価の実現を

京都大学大学院 教育学研究科 准教授 石井英真 / 千葉県教育庁 教育振興部 学習指導課 学力向上室 主幹 梅津健志
茨城県 古河市立総和南中学校 校長 森田泰司

10 学校事例1 京都府 京都市立高倉小学校

幅広い資質・能力の育ちを捉えるパフォーマンス課題を軸に、カリマネを深化

14 学校事例2 大阪府 寝屋川市立石津小学校

道徳ノートを活用し、子どもも保護者も主体的にかかわる評価を実現

18 学校事例3 神奈川県 横浜市立白幡小学校

自主的学習を軸にした授業で、子どもが自ら学習改善を図れる学習評価を目指す

22 指導のヒント

めあての提示や振り返りの工夫で、子どもが自ら学ぶ力を育む

九州大学大学院 人間環境学研究院 准教授 伊藤崇達

連載

巻頭 教育長が語る Leader's VIEW

熊本県 宇城市教育委員会 教育長 平岡和徳
変化を恐れず教育を前進させ続け、
人生を築くデザイン力を育む

30 創造的働き方改革のすすめ——実践の第一歩——

長野県塩尻市 学校事務職員との連携
学校マネジメントコンサルタント、
文部科学省学校業務改善アドバイザー 妹尾昌俊

24 現場につなぐ 新課程GOODプラクティス

プログラミング教育
福岡県 北九州市立門司海青小学校

巻末 リレーメッセージ 令和時代の教育を語ろう

日本教育カウンセラー協会 理事 藤川 章
AI社会でこそ豊かな言葉が基盤となる

26 データで教育を読む Benesse Report

「主体的・対話的で深い学び」の可能性と課題は？

28 教育施策で導く わがまちの未来

島根県益田市
市長 山本浩章

表紙の写真は、福岡県北九州市立門司海青小学校の先生と児童です。同校の取り組みは、P.24～25をご覧ください。

◎すべての記事(バックナンバー含む)を、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます。

<https://berd.benesse.jp> または

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。

子どもがかかわり、子どもに還る

学習評価

カリキュラム・マネジメントをテーマにしたシリーズ第3弾として、今号は「学習評価」を取り上げる。

学習評価は、子どもの成長に結びつけるために行うものであり、

教員の指導改善と子どもの学習改善に生かせるようにすることが大前提になる。

小学校の新学習指導要領の全面実施を目前に控えた今、これからの学習評価のあり方を研究者・教育委員会・学校長の三者による座談会と、小学校3校の実践事例などから考える。



新学習指導要領における 学習評価の基本的な考え方

新学習指導要領の学習評価は、現行課程と比べてどこが変わり、どこが変わらないのか。
文部科学省 国立教育政策研究所発行の「学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編」に
示された内容などを基に、新しい観点別学習状況評価の基本事項について整理した。

「何を見取るのか」を意識し、 多角的な評価を

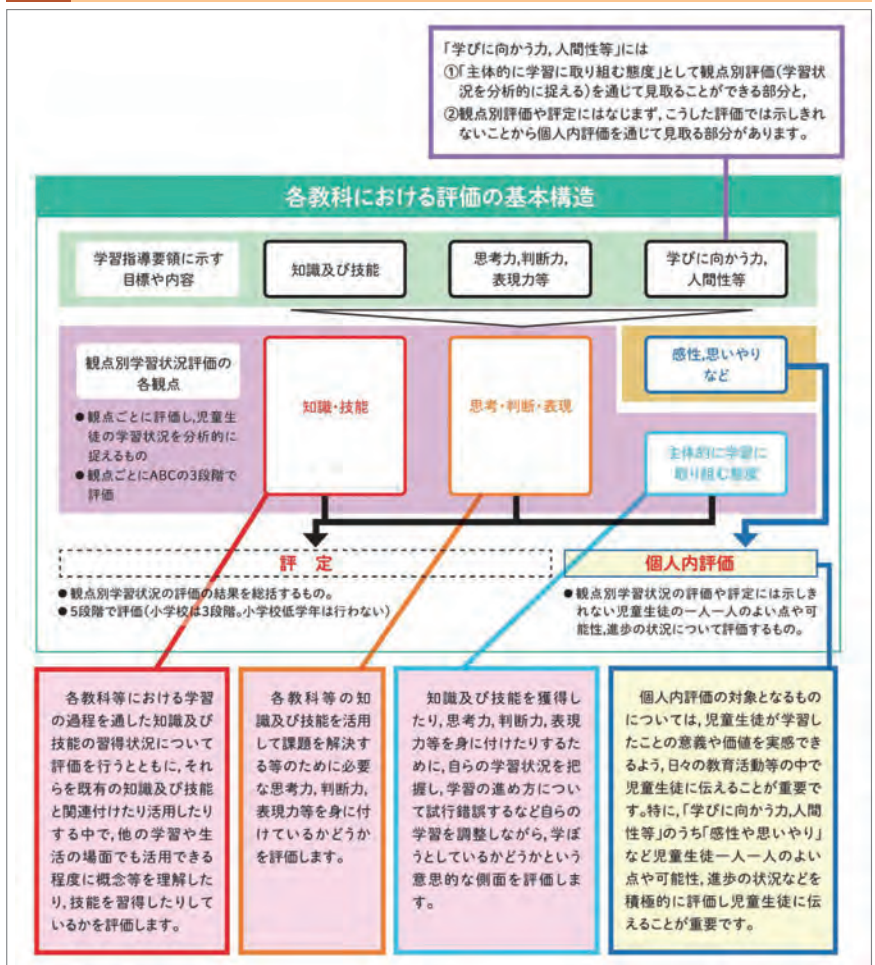
新学習指導要領における学習評価は、主体的・対話的で深い学びの観点から授業改善を行う際の重要な役割を担うものとされている。これは、学校現場におけるこれまでの実践の延長線上にあると言える。

一方、従来のやり方の中で、「必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと」とされている*1。次年度に向けて学習評価のあり方を検討する際は、働き方改革の視点も踏まえながら、各学校におけるカリキュラム・マネジメントのPDCAサイクルを意識した工夫と実践が求められる。

今回、学習評価の観点が4つから3つに変更されたのは、各教科の目標や内容が資質・能力の3つの柱で再整理されたことに対応させるためだ(図1)。指導要録*2に記入する評価の観点も、現行では教科ごとに異なっていた文言が、全教科で統一された(図2)。

3つの観点のうち、「主体的に学習に取り組む態度」は、現行の「関心・意欲・態度」と同じ趣旨ではあるが、「自らの学習を調整する(自己調整学習)」というキーワードを押さえておきたい(図3。自己調整学習についてはP.22~23参照)。この観点を適切に評価するためには、これまで以上に、学習のめあてや見通しを子ども

図1 学習評価の基本構造



*文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編」をそのまま掲載。

も自身に考えさせたり、学習の最後に振り返りの場を設けて目標の達成状況を自己評価させたりするといった工夫が必要だ。学習の途中でそのやり方などを調整しているかを見取することも大切で、単元などのまとまりを通して、子どもの内面の変化を表出させる指導の工夫が求められる。

今後、具体的な評価規準や評価場面を検討する際は、どの資質・能力のどのレベルを測ろうとしているのかを意識することが大切となる(図4)。子どもの学びは連続している。評価の視点を広く持ち、評価の結果を子どもの学びの改善にどうつなげていくかという視点を忘れずにいたい。

*1 中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(2019年1月21日)。
*2 ここでは、文部科学省「小学校児童指導要録(参考様式)」を意味している。

図2 新旧の指導要録と、3つの観点の評価方法

各教科の学習の記録																
教科	観点	学年	1				2		3		4		5		6	
			1	2	3	4	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
国語	知識・技能															
	思考・判断・表現															
	主体的に学習に取り組む態度															
	評定															

↓ 教科ごとに異なっていた観点を、全教科3観点に統一

◎3観点それぞれの評価方法

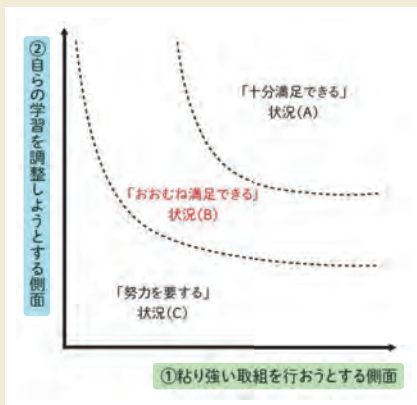
知識・技能 現行の「理解」の観点も含めることに注意。例えば、ペーパーテストで、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスへの配慮、記述式問題や式やグラフで表現する問題の出題など、多様な方法を適切に取り入れる工夫が必要。

思考・判断・表現 3つの要素それぞれを、別々ではなくセットで評価する。ペーパーテスト以外にも、論述やレポートの作成、発表、話し合い、作品制作などの多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりして評価する。

主体的に学習に取り組む態度 ノートやレポートなどの記述、授業中の発言、行動観察、自己評価や相互評価などが材料となる。各教科等の特質に応じて、子どもの発達段階や個性を十分に配慮し、「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価する必要がある。

*文部科学省「小学校児童指導要録(参考様式)」を抜粋してそのまま掲載。

図3 「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ



◎①と②の2つの側面から評価する

①粘り強い取り組みを行おうとする側面

知識・技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力等を身につけたりすることに向けて、粘り強く取り組みを行おうとする側面のこと。

②自らの学習を調整しようとする側面

①を行う中で、自らの学習状況を調整し、学習の進め方について試行錯誤するなどの意思的な側面のこと。子どもがそれを主体的に進められるよう、自己評価・他者評価の場を設けることが重要。

「主体的に学習に取り組む態度」は、現行の「関心・意欲・態度」と評価の趣旨は同じである。しかし、挙手の回数やノートの取り方など、子どもの性格や行動面の傾向で評価をするということではない。①粘り強い取り組みを行おうとする側面、②自らの学習を調整しようとする側面から、子どもを見取るということだ。そして、重要なのは、①と②が知識・技能、思考力・判断力・表現力等の獲得に結びついていない場合、教員が机間指導などを通して適切に指導するということである。

*文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編」を基に編集部で作成。

図4 現行の4観点の評価実践の傾向と、新しい3観点の評価実践の方向性

能力・学習活動の階層レベル (カリキュラムの構造)		資質・能力の要素(目標の柱)		
		知識	スキルの 認知的スキル 社会的スキル	情意 (関心・意欲・態度・ 人格特性)
教科等の枠づけの中での学習	知識の獲得と定着 (知っている・できる)	事実的知識、技能 (個別的スキル) 知識・技能	記憶と再生、機械的実行と自動化	達成による自己効力感
	知識の意味理解と洗練(わかる)	概念的知識、方略 (複合的プロセス) 知識・理解 技能	解釈、関連づけ、構造化、比較・分類、帰納的・演繹的推論	内容の価値に即した内発的動機、教科への関心・意欲 関心・意欲・態度
	知識の有意味な使用と創造(使える)	見方・考え方(原理と一般化、方法論)を軸とした領域固有の知識の複合体 思考・判断・表現	知的問題解決、意思決定、仮説的推論を含む証明・実験・調査、知やモノの創発(批判的思考や創造的思考が深くかかわる)	活動の社会的レリバンズに即した内発的動機、教科観、教科学習観(知的意向・態度) 主体的に学習に取り組む態度

左図は、資質・能力の3つの柱を、「知っている・できる」「わかる」「使える」の3段階に構造化したものだ。それに、現行課程の4観点と、新課程の3観点の領域を対応させ、3観点で評価する領域をイメージできるようにしている。また、評価方法として、知識や認知スキルの習得状況を見るのであれば、穴埋めや選択式のテストで評価できるが、社会の中での活用力を問う場合には、実際にタスクを課して評価することが適切になる。

4 観点 ———— 3 観点

*石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』(日本標準、2015)、を基に編集部で作成。

目標・指導・評価の一体化を図り、 未来の学習につながる評価の実現を

新学習指導要領の全面実施を控え、「主体的・対話的で深い学び」の視点での指導改善が期待される中、教育委員会や学校は、学習評価についてどのような意識を持ち、次年度に向けてどういった準備が必要になるのか。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」の委員を務めた研究者と、教育委員会、学校長の3人が語り合った。



京都大学大学院 教育学研究科 准教授

石井英真 いしい・てるまさ

専門は教育方法学。中央教育審議会「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」委員。主著に『小学校 新指導要領改訂のポイント』（共著、日本標準）等。

千葉県教育庁

教育振興部学習指導課学力向上室 主幹

梅津健志 うめづ・たけし

千葉県公立小学校で教諭を務めた後、柏市教育委員会学校教育部指導課課長、柏市立酒井根東小学校校長等を経て、現職。

茨城県 ^{こが}古河市立総和南中学校
校長

森田泰司 もりた・やすし

古河市の公立小・中学校の校長を歴任。古河市教育委員会参事、独立行政法人教員研修センター主任指導主事等を経て、現職。

目標・指導・評価の一体化

子どもの姿で目標を捉えて その目標を評価対象に

——小学校新学習指導要領の全面実施を控えた現場の状況をお教え下さい。

梅津 多くの学校が新学習指導要領の趣旨を踏まえて指導改善を進めていますが、「資質・能力」や「見方・考え方」の理解がまだ十分でない教員が見られます（図1）。また、観点別学習状況評価（以下、観点別評価）が3観点になることは知っていても、なぜそうなるのかを理解せずに、用語だけを見比べて、「現行の4観点評価と

変わらない」と捉える教員もいます。教育委員会としては、学習評価の趣旨を周知するとともに、資質・能力への理解がさらに深まるよう、教員をいかに支援するかが課題です。

森田 ここ数年で若手教員の割合が増えたことも、学習評価のあり方への理解が深まらない一因です。指導経験の浅い教員は、主体的・対話的で深い学びの実践に精いっぱい、育成した資質・能力をどう評価すればよいかにまで考えが至っていません。

石井 評価のあるべき姿は、授業・単元・教科において目標に掲げた「子どもに身につけてほしいこと」を、

そのまま評価の対象とすることです。よく、「指導と評価の一体化」と言われますが、「目標と指導と評価の一体化」こそが重要です。

森田 「何を評価すればよいのか」と難しく考えすぎず、掲げた目標に到達したかを確かめるということです。ただ、特に若手教員には、自身が掲げた授業の目標と、子どもが取り組む学習活動との間にずれがある場合が見られます。そのため、最後のまとめや振り返りが、教員が立てた授業の目標と一致しない授業になってしまうのです。

石井 その原因は、目標を子どもの姿

図1 「知の構造」を用いた教科内容の構造化

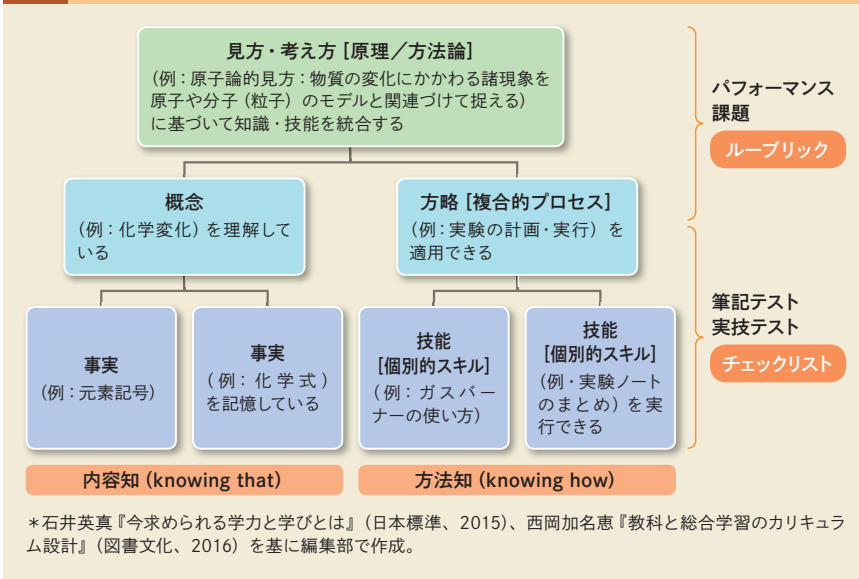
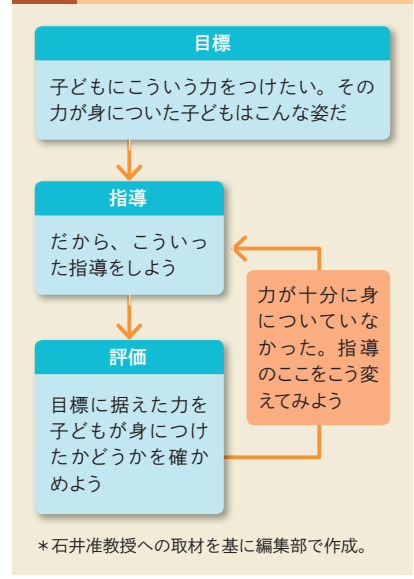


図2 目標・指導・評価の一体化



で捉えられていないからではないでしょうか。単に「〇〇力」を目標にするのではなく、その力が身についている子どもとはどんな姿なのかを、具体的に思い描くことが重要です。例えば、体育の跳び箱の授業であれば、どのように跳んだら「跳べた」といえるかをイメージしておきます。それができれば、おのずと評価規準を設定でき、どのように指導したらその姿が表れるのかを考えることで、評価方法も絞り込むことができます(図2)。

子どもが成長した姿は何か その姿を捉えられているか

石井 すべての教員が、子どもの姿を具体化して目標とすることは、容易ではありません。例えば、引き算の評価で、「引き算の概念を理解している」とはどんな姿かを具体的に考えてみると、繰り下がり引き算の問題が不正解だった時に、単に「計算ができていない」と捉えるか、つまづきを見取って「引けないところを無視している」と誤答の要因を捉えられるかは、教員の力量にかかってきます。そうした見極めを一部の教員の経験のみに頼らず、どの教員

も見るべき視点を押さえられるよう、目標の枠組みを示して共通理解を図るとよいでしょう(P.5 図4)。

梅津 子どもを見る目を養うためには、複数の教員が単元で目指す子どもの姿を話し合い、指導案を作るといった研修が考えられます。その授業と学習評価を実際に行えば、目標・指導・評価の一体化を実感できます。

石井 目標設定には教材研究が欠かせませんが、ここでも「この問題はここでつまづきやすい」など、教材を子ども目線で捉えることがポイントです。教科書を教えるのではなく、教科書で何を教えるのか。子どもの姿が見えていると過信せず、子どもが成長した姿とは何か、自分はその姿を捉えられているかを常に問い続けることが重要です。

評価方法のあり方

学びを総合化して取り組む「見せ場」のある評価課題を

森田 これまでは主に客観テストの得点を基準に評価してきたため、表面に出にくい資質・能力の評価をどのように行うかは大きな課題です。

石井 観点別評価の目的は、単元・教

科ごとに子どもの成長を見取り、ペーパーテストなどの客観テスト以外にも多様な方法を用いて評価し、教員の指導改善や子どもの学習改善に役立てることで。評価方法は、大学で行われている形態がヒントになると思います。大学では、評価対象に応じた方法を複数組み合わせるのが一般的です。例えば、テストで知識・技能、レポートで思考力・判断力・表現力、コメントシートで関心・意欲・態度を評価し、「テスト40%、レポート50%、コメントシート10%」など、科目の目標に応じた比率にします。

また、大学では、授業中の学生の様子を評価することはほとんどせず、テストやレポートなど、学習成果を可視化する場を設けて評価します。評価規準だけを作り込んで、それを日々の学習場面に持ち込むのではなく、目指す子どもの姿が最も表れる「見せ場」を設けて評価するとよいでしょう。

——「見せ場」とは、具体的にどのような場面でしょうか。

石井 体育祭や文化祭等の行事をイメージするとよいでしょう。それらは、子どもの活動の成果や成長を総合的に表現する絶好の「見せ場」です。ペーパーテストも「見せ場」として

位置づけられますが、無味乾燥です。技能教科では作品の制作と発表は豊かな「見せ場」になりますし、国語では新聞作りや書籍の帯の作成といった単元を貫く言語活動が挙げられます（知識・技能を総合的に使いこなすパフォーマンス課題）。文部科学省「全国学力・学習状況調査」のB問題、教科書の演習問題なども、作問や評価課題づくりのヒントになります。

梅津 前任校では、2019年度から、6年生の「総合的な学習の時間」で、地域の商店街と連携し、1グループが1店舗を担当して、店の特徴を生かした商店街のイベントの企画・運営を行う地域活性化活動を始めました。目指す子ども像の実現に向けて全教員で話し合っ7つの資質・能力を設定し、それらの育成を意識して行ってきた教科学習や特別活動の成果なども合わせて、試す場となっています。

石井 「見せ場」には、作品を学校の玄関に展示したり、地域で発表したりするなど、観客がいることも重要です。梅津主幹の前任校の活動では、授業での学びを生かし、商店街の活性化という自分にも深く関係のある課題に取り組み、商店街の人や来店者に成果を評価されます。子どもは真剣に取り組みますし、それだけに評価も真摯に受け止められるでしょう。たとえ失敗しても、次の学習に生かせる手応えを得られます。そうした未来につながる評価とすることが大事です。

梅津 その視点は、カリキュラム・マネジメントを行う上でとても重要で

図3 授業における、情意領域の形成的評価の考え方

授業構成		情意の中身		評価における位置づけ
導入	<ul style="list-style-type: none"> めあての提示 課題設定 	入口の情意 (学習内容への興味・関心・意欲など)	学習を支えるもの	授業の展開を調整するための手がかりとなる子どもの様子であり、指導改善に生かすために行う評価
展開	<ul style="list-style-type: none"> 活動 課題解決 	情意の変容		
まとめ・振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容のまとめ 自己評価・他者評価 	出口の情意 (知的態度、思考の学習習慣、科学的教養に裏づけられた倫理・価値観など)	その後の学習を方向づけるもの	授業を通して子どもの中に起きた価値ある変化であり、目標として掲げうるもの

情意については、「目標に掲げても評定せず」が原則となる。総括的評価の材料としては、単元単位のパフォーマンス課題などに取り組む中で、思考・判断・表現とセットで評価することが望まれる。

*石井准教授提供資料・取材を基に編集部で作成。

す。地域の人たちに本校で学んだ子どもの姿を見てもらうことで、本校の教育活動への理解を得る機会になり、次の連携にもつながっています。

石井 なお、グループ活動の評価では、一人ひとりが振り返りを書く機会を設けるなど、個々の思考を記録しておくことが必要です。それをグループ活動の成果と照らし合わせることで、一人ひとりを評価できます。ほかにも、レポートや面談で、グループ活動の経験が自身の成長にどう生きているのかを述べさせる方法も、個人の評価には有効です。

森田 振り返りは、自身の成長と課題を認識するために必要であり、地道に続けることが重要だと考えます。ICTを活用すれば、そうした振り返りの蓄積も容易になります。発達段階に応じて、子ども自身が自らの学びをメタ認知し、次の学習につながるように、私たち教員が支援していきたいものです。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

入口の関心・意欲ではなく出口の情意を評価する

森田 資質・能力の3つの柱に合わせて3観点評価となったこと自体には違和感が少なく、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の観点については現場の混乱はあまりなさそうです。ただ、「主体的に学習に取り組む態度」がイメージしにくく、本時の授業だけでなく、次の授業や将来に向けた態度も評価対象とされた点についても、評価のしづらさを感じています。

石井 情意領域である「関心・意欲・態度」は、目に見えにくいことから、多くの場合、挙手回数やノート、提出物などで評価していたために、目標と評価が一致していない状況でした。

情意の中身には、入口と出口があります。入口の情意とは、学習内容への関心や意欲であり、教員が授業をしながら確かめて、授業展開の調整に活用するものです。そのため、成績として評定すべきではないと考えます。一方、出口の情意とは、学び続けようとする意志や批判的に思考する態度等のことで、学習を通して子どもに根づく価値観です。その後の学習を方向づけるものであり、目標として評価対象となり得ます。日々の授業で出口の情意を形成的に評価し、意識的に育て



挑戦的な「見せ場」を設けて、学びを総合化させるとともに、未来に広がりのある評価に。

京都大学大学院 准教授 石井英真



保護者面談で 子どもの様子や次の目標を 保護者と共有し、 同じ目線で子どもを支援する。

千葉県教育庁 主幹 梅津健志

つつ（図3）、総括的評価については、「見せ場」（パフォーマンス課題）やそれに向けた活動のプロセスを通して、思考・判断・表現とセットで情意面の育ちも見えていくとよいでしょう。

森田 授業中の子どもの姿を一面的に見取るのではなく、次時以降の学びのために評価するのだという、教員の発想の転換が必要なのだと改めて思います。

保護者への説明

子どもの成長を共有し 喜び合える関係を築く

梅津 学習評価の趣旨を、保護者に改めて説明することも重要です。通知表は、子どもの学習の「査定」だと捉える保護者が少なくないからです。

石井 保護者にとって子どもの成長を感じられる場が通知表に限定されていると、その評価基準や記述内容の根拠に対して敏感になるのは当然のことです。保護者が最も納得するエビデンスは、我が子の姿そのものですから、通知表以外の場面で子どもの成長や課題を実感できれば、数値ではない評価規準も納得できるのではないのでしょうか。子どもの成長を、本人や保護者と共有する場をできるだけ多く設ける工夫が大切です。

梅津 対面以外で子どもの様子を発信する有効な手段は、ウェブサイトだと思います。前任校では、ブログに教育活動を紹介する際、必ず活動の目標も書きました。何の力をつけるために

活動し、その結果、どんな子どもの姿が見られたかを紹介し、課題があればそれも併せて発信したところ、アクセス数は月平均1万件以上と飛躍的に増えました。そして、ブログを見た保護者や地域の人たちが本校の目指す子ども像を理解し、教育活動に積極的に協力してくれるようになりました。

石井 普段から保護者と子どもの姿を共有し、その成長を喜び合える関係を築けば、教育活動の透明度が上がり、信頼性の向上につながります。保護者との連絡機能である学校通信や授業参観、面談、家庭訪問、通知表などを、保護者との信頼関係を築く手段として捉え、学校全体で一貫性を持って活用したいものです。

梅津 通知表の形は校長裁量で決められるため、前任校では、1学期末の通知表の総合所見によい点を1つ書き、詳しくは面談で保護者に直接伝える形式にしました。子どもの状況と次の学期末までの目標を保護者と共有し、教員と保護者が同じ目線で子どもを支援できる態勢にしたのです。働き方改革の一環として、家庭訪問や保護者面談の回数を減らす学校があ

ると聞きますが、働き方改革の目的は授業の充実にあります。保護者との信頼関係を築くための活動の削減は、慎重に検討すべきだと考えます。

2020年度の全面実施に向けて

学校教育目標を策定し 全教員で共有

——学校や教育委員会は、全面実施までに何を行えばよいでしょうか。

森田 年度末までに学校がすべきことは、学校のグランドデザインを策定し、全体で共有して、教員が学校教育目標を教科や学年の目標に落とし込み、その達成を目指した授業づくりができるようにすることです。本校では、教員にも子どもにも分かりやすいよう、学校教育目標を1つに絞り、明確な言葉で表しています。また、学校は日々の活動に精いっぱいなことが多いので、教育委員会が、グランドデザインの策定や目標を基にした指導改善と評価の重要性を粘り強く伝え、支援することが重要でしょう。

石井 子どもの姿を具体的に思い描きながら目標・指導・評価を考えていけば、子どもは必ず変わります。新しい活動をする必要はなく、普段の教育活動一つひとつを何のために行っているのか、それが子どもの学びにどうつながっているのかを意識しながら次年度の計画を立て、評価すること自体が目的になっていないかを、新年度を迎えるまでに今一度、学校全体で振り返ってみるとよいでしょう。

先生方が教科・単元の目標を 子どもの姿で落とし込めるよう、 学校教育目標はシンプルに。

古河市立総和南中学校 校長 森田泰司



幅広い資質・能力の育ちを捉える パフォーマンス課題を軸に、カリマネを深化

京都府 京都市立高倉小学校

京都府京都市立高倉小学校では、「読解力」の育成に向け、学習評価を軸としたカリキュラム・マネジメントを進めている。その中でも重要な取り組みが、子ども自身が既習内容を活用して問題を解決するパフォーマンス課題だ。教員が作成する課題を通して子どもの成長を多角的に捉え、教育活動全体でPDCAサイクルを機能させている。



© 1995年度、5つの小学校が統合して開校。京都市の中心部に位置する。「地域の子どもは地域で育てる」という強い理念の下、コミュニティ・スクールや小中一貫教育にも力を注ぐ。

校長 岸田蘭子先生
児童数 686人
学級数 24学級（うち特別支援学級2）
電話 075-211-8784
URL <http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=102803>



校長
岸田蘭子
きしだ・らんこ

同校に赴任して6年目。



副教頭
八木悠介
やぎ・ゆうすけ

同校に赴任して6年目。



研究主任
福井博美
ふくい・ひろみ

同校に赴任して2年目。



教諭
谷園 淳
たにぞの・まこと

同校に赴任して2年目。
3年生担任。

カリキュラム・マネジメントの推進

年度末に指導を振り返り、 単元計画を見直す

京都府京都市立高倉小学校は、学校教育目標に「よりよい生き方を求めて、誇りをもち、未来にはばたく高倉の子」を掲げ、価値ある学びと育ちができる教育を推進している。

2006年度、「読解力」の育成に着手し、授業時数を調整して同校の独自の教科「読解科」（現在は、「読解の時間」）を設定したことを契機に、単元配列表を作成してカリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）を進めている。読解力は、「課題設定力・情報活用力・記述力・コミュニケーション力」の4つの力で構成されると定義した。それらの育成に向けては教育課程全体を見直す必要があり、岸田蘭子校長はそのねらいをこう語る。

「授業時数が限られる中、教科を個別に指導しては、その効果には

限界があります。『読解の時間』と各教科の学びを相互に結びつけることで効果的な教育活動ができるよう、カリマネに取り組んでいます」

「読解力」と教科の関連づけが進むにつれ、教育活動全体を通じた目標・指導・評価の枠組みが明確になっていった。それらの枠組みは、評価や校内研究を通して絶えず改善に努めている。例えば、年度末には、研究主任や読解主任、重点教科の主任などで構成される研究推進部を中心に、カリキュラムやループリックが適切かどうかなどを議論する。読解力の4つの力が十分に育っていないなどの課題が見られれば、次年度の単元の内容や配列、授業内容を見直す。

「『もっと早い時期にこの思考ツールを教えた方がよい』『この教科のこの単元で、コミュニケーション力や記述力を養う必然性を高めたい』といった意見を交わし、カリキュラムを改善しています」（岸田校長）

パフォーマンス課題の実践

学習内容を総合的・発展的に 活用できる課題を作成

評価方法として重視しているのが、算数科を中心に取り組むパフォーマンス課題だ。課題の内容は、単元を

通して身につけた資質・能力を総合的・発展的に活用できる内容として、教員が作成。子どもは、多様な考え方で課題に取り組み、結果をそれぞれの発想で表現する。研究主任の福井博美先生は、次のように説明する。

「パフォーマンス課題は、日常生活と関連づけたり、ストーリーを持たせたりして、単元の冒頭に提示します。そうすることで、子どもは、単元の最後まで学習課題に関心を持ち、課題解決のために必要な知識を自ら考えて、意欲的に学んでいきます」

パフォーマンス課題では、従来の評価の4観点のうち、特に「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」を捉えることを重視している。

「1つの課題ですべての観点を評価しようとする、課題の焦点がぼやけてしまいます。そこで、単元ごとのペーパーテストでは知識・技能の習得を、パフォーマンス課題では知識・技能の活用を捉えるように使い分けています」(岸田校長)

3年生の算数「重さ」(全10時間)で行ったパフォーマンス課題を通して、子どもがどのように学び、教員は子どもの育ちをどのように捉えていったのかを見ていこう。

本単元のねらいは、単位と測定の意味を理解し、kgやgが混在した重さの計算ができることと、物の重さを量るのに適切な計器を選び、重さを正確に量ることだ。そこで、9時間目に行うパフォーマンス課題は、『手の感覚王はだれだ!』クイズをしよう」と題して、子どもが自宅から持ってきた物の重さを、1kgの砂袋と持ち比べて予想し、計器で量った実際の重さと予想との誤差が最も少ない物はどれかを調べるといった活動にした(図1)。八木悠介副教頭は、次の点を強調する。

「本校では、1つの学習がほかの教科や日常生活にも関連していること

図1 3年生 算数「重さ」のパフォーマンス課題とルーブリック

◎パフォーマンス課題

重さについての学習を進め、重さ調べでだれの誤差が一番少ないかを調べる「手の感覚王はだれだ!」クイズをします。たくさんの物の重さを量って、手の感覚を身につけましょう。その時、ワークシートに量る物と選んだ計器を書き、予想した重さと実際の重さと誤差を書いてください。

ルーブリック	3	<ul style="list-style-type: none"> 適切な計器をワークシートに記述し、重さが近い物を複数紹介している。 実際の重さと誤差が少なくなるよう、量感に基づいて予想を立てることができる。 量る物に応じて計器を適切に選択して重さを正確に測定し、加減計算をすることができる。
	2	<ul style="list-style-type: none"> 適切な計器をワークシートに記述し、重さが近い物を紹介している。
	1	<p>【1の子どもに対する支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習したことを側面掲示することで、重さの単位や計算の仕方を想起できるようにする。 教室内に、自由に重さを量ることのできるコーナーを用意しておくことで、量感を養うことができるようにする。

*高倉小学校提供資料を編集部で一部改変して作成。

を子どもに意識させることで、幅広い資質・能力を育み、子どもの人生をより豊かにする視点を大切にしています。本単元でも、算数の重さの学習が家庭科などの他教科と関連し、日常生活にも役立つことを実感できるパフォーマンス課題にしました」

最後まで意欲的に学べるよう単元のゴールを最初に示す

まず、単元の最初の授業では、単元の終盤に行うパフォーマンス課題を提示。子どもに「手の感覚王になりたい」という目的意識を持たせ、授業への意欲を高めた。3年生担任の谷園^{まこと}淳先生は、次のように語る。

「毎回の授業では、パフォーマンス課題のゴールを話したり、黒板に書いたりして、子どもが単元を通して意欲的に学べるようにしました。また、授業で使った計器や砂袋を授業後も教室に置いたところ、休み時間にそれらを使って学習内容を確認したり、重さの感覚を養おうとしたりする子どもの姿が見られました」

そして、9時間目にそれまでの学習内容を活用し、4～5人のグループでパフォーマンス課題に取り組んだ。まずは個人ワークで、友だちが

持参した3つの物について重さを予想。その重さを量るための適切な計器を4種類の中から選んで計測し、実際の重さと予想の差を計算した。例えば、「1kgの砂袋と重さが似ているから、1kg300gと予想しよう。だから、2kg用の上皿てんびんを使おう」といったように、既習事項を活用して課題に取り組んだ(写真)。

次に、グループ内で誤差の小さかった上位3人の数値を記入したワークシートを黒板に貼り、全グループの数値を比較。どのように重さを求めたのか、各自が工夫したことを発表し、適切な計算方法や計器の選び方などを共有した。

「前年度は、個人の感覚王を選ぶ活動のみでしたが、周りと比べて誤差



写真 単元を通して培った知識や感覚を生かし、友だちが持参した物の重さを予想して計量。誤差をできるだけ小さくしようと、子どもたちはこれまでに量った物の重さと比べながら真剣に予想し、正確に量ろうとする姿が見られた。

の大きかった子どもの学習意欲が持続しなかったと総括されていました。その課題を踏まえて、本年度は、『グループ対抗の感覚王』も設定し、子ども全員が最後まで意欲的に学べるようにしました」(谷園先生)

パフォーマンス課題の評価

ルーブリックを基に、子どもの発言や記述から成長を捉える

パフォーマンス課題のルーブリックは、子どもが学習の目的を明確に持てるよう、基本的に単元の最初に示すが、あえて提示しない場合もある。

「パフォーマンス課題は、子どもにとって評価の場であると同時に、学びそのものでもあります。ルーブリックを示し、学び方を意識させることでパフォーマンスが高まりそうな場合は、先に提示します。一方、ルーブリックを示すことで発想を限定してしまう可能性がある創作活動などでは、最後まで示さないこともあります」(岸田校長)

本単元では、単元の冒頭にルーブリックを提示後、教員は単元を通して子どもの発言やグループ内での対

話の様子を捉えたり、ノートの記事や各授業の振り返りで書く内容を確認したりして評価した。例えば、谷園先生は、パフォーマンス課題の評価では、振り返りの内容を見取り、関心・意欲・態度の育ちを捉えた(図2)。ほかに、知識・技能の理解度を確認するペーパーテストも実施した。

同校では、読解力の育成に向けて、対話的な活動や自分の考えを記述する活動を、日常的に設定している。教員は、授業を通した一人ひとりの学びの姿を観察し、ノートや振り返りの記述、作品や作文などを通して各観点の評価を行う。

また、思考・判断・表現や関心・意欲・態度を評価する材料として、グループでの学び合いや発表などを通して、「友だちから学んで大切だと気づいたこと」を、全教科でノートに青字で書かせている(図3)。

「友だちの考えを聞いて、自身の考えをどのように深めているか、周囲から積極的に学ぼうとしているかといった子どもの姿を可視化しています」(福井先生)

本単元に用いた指導案やルーブリック、教材は、事後研修会のま

めとともに校内の共有フォルダに整理して次年度に引き継ぐ。次の3年生の担任は、それらの資料を見ながら、目の前の子どもの実態や課題に応じて調整し、授業を行っていく。

同校では、そうした学習評価を軸に据えた指導改善の仕組みで、カリマネを機能させている。

教員の評価力を高める研修体制

若手教員を対象に年10回の研修会を実施

全教員がパフォーマンス課題を活用して適切な学習評価ができるよう、校内研修にも力を注ぐ。

京都大学大学院の教育方法学講座と連携し、全教員が参加する研修を毎年実施。5月に理論を学んだ上で、年度末の2月に実際に行ったパフォーマンス課題や成果物を持ち寄り、課題やルーブリックについて検討するワークショップを開く。「課題の内容をこう変えると、子どもの意欲が高まるのではないか」「ルーブリックのこの表現を明確にした方がよい」「指示内容を変えると子どもの意識が変化してパフォーマンスが高

図2 パフォーマンス課題で子どもが記入した振り返り

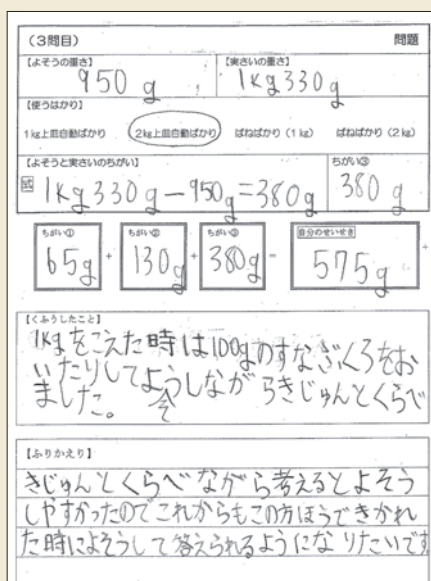
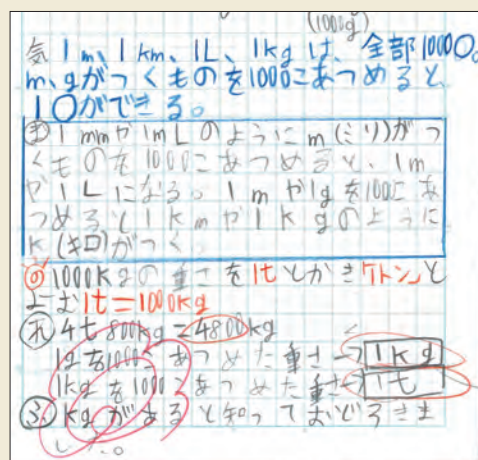


図3 子どもの授業ノート



まるのではないか」など、多様な意見が交わされている。

さらに、教職5年目までの教員を対象に、カリマネやパフォーマンス課題を含めた教育活動全体に関する「若手研修会」を年10回程度実施している。ほかにも、新採や異動で同校に赴任した教員を対象に、赴任直後の4月に同校の教育活動の方針を共有する場を設けている。

「授業力を高めるためには、適切な評価の視点を持つことが欠かせませんが、経験の浅い教員には難しい面もあります。そこで、公開授業の事後研修会などで、子どもの姿を通し

て、『こんな発言や記述に資質・能力の育ちが見られる』などを伝え合い、教員間で子どもの見方を共有しています」（八木副教頭）

3観点への対応

評価の観点が再整理された意図を校内研修で共有

新学習指導要領で観点別学習状況評価が3観点に変わることにしても、学校全体で準備を進めている。2019年6月、国立教育政策研究所から『学習評価の在り方ハンドブック』が公開されたことを受け、8月

に全教員参加の研修を実施した。

「評価の観点が3つになった意図を十分に理解していなければ、資質・能力を育む授業づくりはできず、また、保護者に評価の根拠を説明することもできません。『知識・理解』と『技能』が統合された意図や、『主体的に学習に取り組む態度』として評価すべき姿を始め、新学習指導要領での評価の基本方針を共有しました」（岸田校長）

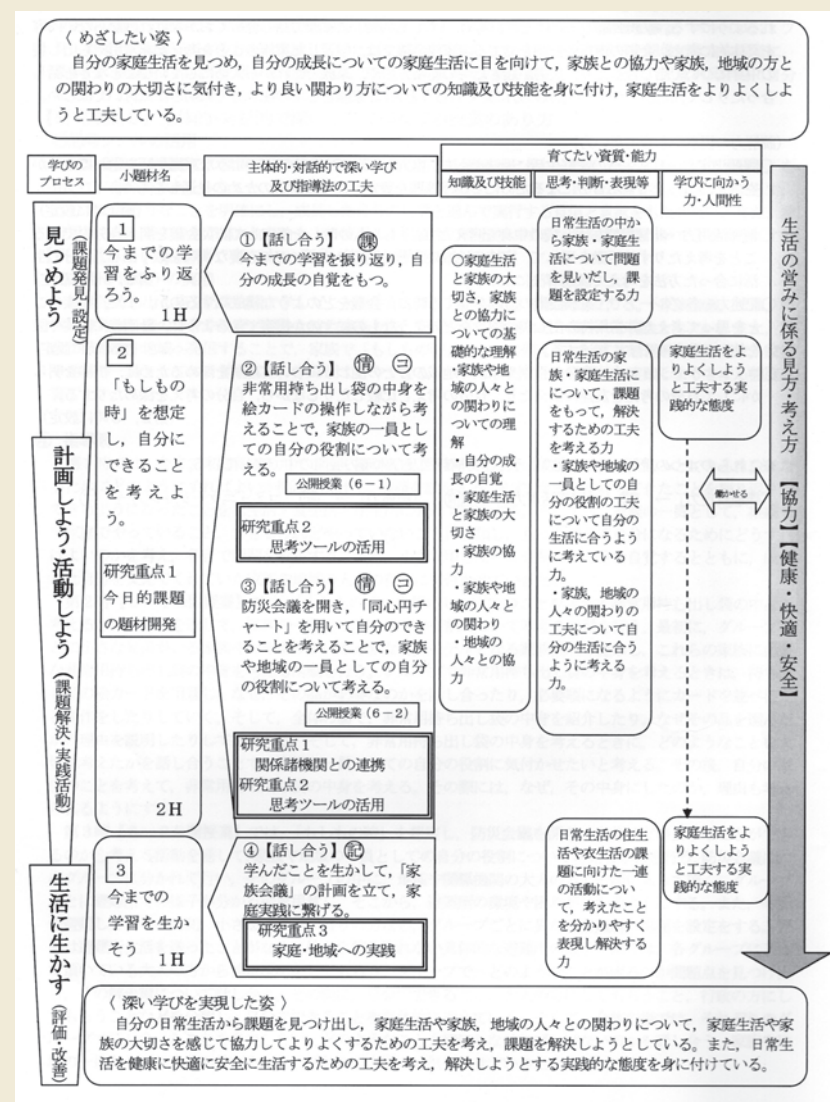
現在は、単元や授業の構造を3観点評価で捉え直す作業を進めている。10月に同校で開催した「近畿小学校家庭科教育研究会 京都大会」では、家庭科の単元の流れに沿って、育成すべき資質・能力の3つの柱を整理して示した（図4）。

「ここで示した『育てたい資質・能力』を裏返して捉えると、3観点の評価規準になります。次は、それぞれの資質・能力が身についたかをどのようにして測るか、方法論の検討に入っていきます」（岸田校長）

今後は、家庭科以外の教科でも3観点での捉え直しと評価方法の検討を進め、2020年2月に行う研修では3観点の授業・評価のあり方を共有する。また、今年度中には評定の方針も検討して、2020年6月までに校内・保護者に周知する方針だ。さらに、小中連携も進めていることから、地域の中学校と評価のあり方の目線合わせも行う予定だ。

「3観点を捉える上で、パフォーマンス課題は非常に有効だと考えています。より多くの教科・単元で実施するために、今後も校内研究に取り組めます。本市では、教科・領域ごとの年間指導計画・評価計画である『京都市スタンダード』を公開してきましたが、カリマネに基づくパフォーマンス課題への取り組みも全国的に発信して、これからの子どもたちに求められる学力を支える環境づくりに貢献していきます」（岸田校長）

図4 育てたい資質・能力を整理した家庭科の題材構想



*高倉小学校提供資料をそのまま掲載。

道徳ノートを活用し、子どもも保護者も主体的にかかわる評価を実現

大阪府 寝屋川市立石津小学校

大阪府寝屋川市立石津小学校では、10年以上にわたる研究の成果を生かして、道徳科の評価方法を確立させた。「評価の観点」を示し、学校全体で評価規準を統一。授業公開などで、保護者とも評価のあり方を共有している。また、算数科では、学期末に知識・技能の活用力を問うテストを実施し、思考・判断・表現等の評価方法を試行中だ。



©1982年に開校。学校教育目標は「豊かな人間性と強い連帯感を持ち、自主的に考え、何事もやり通せる児童」。同一中学校区の1中2小で小中一貫教育を推進し、地域で指導力向上を図っている。

校長 森本朋美先生
 児童数 298人
 学級数 17学級（うち特別支援学級5）
 電話 072-838-9312
 URL <http://www2.city.neyagawa.osaka.jp/school/e/ishizu/>



校長
森本朋美
 もりもと・ともみ

同校に教頭として赴任後、校長に着任し7年目。



校内研究推進部部长
竹内寿康
 たけうち・としやす

同校に赴任して4年目。5年生担任。



教務主任
釜我あゆみ
 かまが・あゆみ

同校に赴任して5年目。道徳教育推進教師。音楽専科。

道徳科での学習評価

「道徳ノート」や板書の画像から子どもの内面を見取る

育成を目指す子ども像に「誰とでも、どんな場面においても協働できる子ども」を掲げる大阪府寝屋川市立石津小学校では、その子ども像の具現化を目指して、道徳科と算数科で実践研究を進めている。森本朋美校長は、次のように語る。

「本校には30代前半までの若手教員が多く、指導力向上が課題です。道徳科と算数科で合わせて年13回行う公開授業は、主に若手教員が担当します。同一中学校区の小・中学校と合同で行う場合もあり、校内に加えて、他校の教員からも指導方法や子どもを見る視点についてアドバイスを得られる場となっているため、先生方は熱心に研鑽を積んでいます」

では、同校の道徳科と算数科の学習評価について、それぞれ見ていこう。

同校では、2009年度から道徳教育の実践研究を進めてきた。特に、2016年度からは、道徳の教科化を見据えて重点テーマを「評価」とし、評価の目的を「児童を励ます評価」「授業改善の資料としての評価」と位置づけた。評価の際に子どもを見取る方法として用いているのが、学校独自の「道徳ノート」と、授業ごとの板書の画像だ。

研究初期に導入した「道徳ノート」は、子どもが書いた授業の振り返りから学習状況や道徳性にかかわる成長の様子を見取り、認め、励ます評価に活用してきた。道徳教育推進教師を務める釜我あゆみ先生は、次のように説明する。

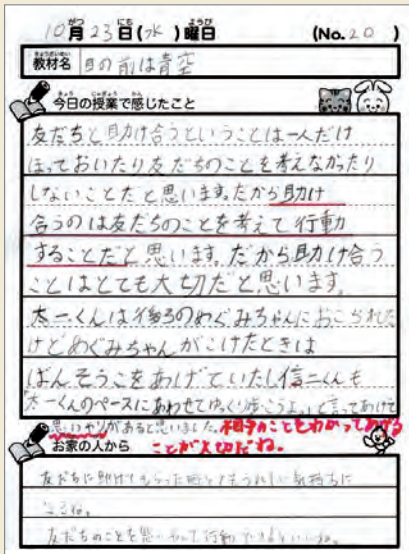
「『道徳ノート』では、授業の目標にかかわる記述に着目し、該当箇所に下線を引くなどして、子どもが考えをさらに深められるようなコメントを書いています（図1）。目標とずれた記述があれば、問い返すコメン

トを書き、子どもが立ち戻って考えられるようにしています」

ただ、書くことが苦手で、「道徳ノート」に自分の考えを表現できない子どもの内面は、どう見取ればよいかといった課題があった。当初は、そうした子どもを中心に、授業中の気になる発言や様子を教員がその都度書きとめていたが、教員の負荷が大きいくちもあって長続きしなかった。そこで、次に行ったのが、授業の板書の撮影だ。黒板には、授業中の子どもの発言を教員自身が整理し

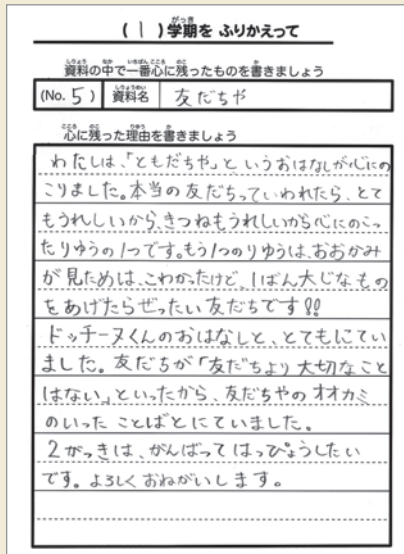
図1 「道徳ノート」の子どもの記述と、教員の評価(例)

◎授業の振り返り



子どもの記述(赤字の下線)から、本時のねらいとする価値に迫ることができたと担任は評価し、励ますコメントを記している。

◎学期ごとの振り返り



この振り返りでは、以前読んだ資料で学んだことと比較し、自分にとって価値あるものを自覚し、それを深めようとしている姿が表れていることを評価した。



「道徳ノート」は、進級時に次の担任に引き継ぎ、子どもの理解を深める資料としても活用している。(イラスト: ©コンドウカナエ)

*3点とも、石津小学校提供資料をそのまま掲載。

て書く。その板書の画像を見返せば、授業中の子どもの姿が思い起こされ、評価に活用できると考えたのだ。

板書の画像データは、校内の共有フォルダで管理。月1回、各教員に自身でよいと思った板書の画像を提出してもらい、それらの中で共有すべき板書をプリントアウトして廊下や目に止まりやすい場所に掲示している。各教員は、他の教員の板書を見ることで、板書の仕方の参考にしたり、授業づくりや授業改善に生かしたりすることができるという。

通知表は2部構成で記述し、子どもの成長を伝え、励ます

通知表や指導要録での評価の書き方も、学校全体で統一した。新学習指導要領やその解説の該当箇所を読み解き、先進校の取り組みや研究者の見解を勉強し、全教員で意見を出し合った。そうして作成したのが、「評価の観点の一覧」(P.16図2)だ。

通知表の記述は、前半と後半に分

け、前半は学習活動の様子を踏まえた子どもを励ます内容、後半は具体的な学習状況の記述とし、全体で100~150字程度で簡潔に表現することにした。森本校長は、前半の評価について次のように説明する。

「担任は、子どものキラリと光る部分に焦点をあてて評価をしますが、それは限定的な評価であり、学習指導要領の解説*で示された『大きくりなまとまりを踏まえた評価』にはあたらなないと考えました。そこで、大きくりの評価の仕方について議論をした結果、学期や学年など一定期間のまとまりの中で捉えた子どもの姿、例えば、『めあてについて深く考えていた』『自分の思いをしっかりと書いていた』などとすることにしました」

ただ、大きくりの評価だけでは抽象的な文章となり、子どもも保護者も何を評価されているのかが分かりにくい。そこで、通知表の記載を前半と後半の2部構成とし、後半に具体性を持たせた。

一方、指導要録には、前半の評価

のみを記載することにした。指導要録は公共性が高く、子どもの具体的な記述はなじまないと判断したからだ。

教員の主観が評価に影響する可能性についても、時間をかけて議論した。その結果、目に見えないものは評価しないこととし、「意欲が高まった」「深く思っていた」といった記述はしない方針とした。

「『教員の実感で褒める』といった評価の考え方もありますが、通知表のように文章で残す場合には、根拠を示せない記載はしないことにしました。結果的に、似通った文章になるかもしれませんが、正当性を高めることを重視しています。評価の自由度が狭まるため、通知表は学年末のみの記載とし、その分、『道徳ノート』で、子どもを褒めて励ます評価を重視しています」(釜我先生)

大きくりなまとまりで評価するための資料として、「道徳ノート」には学期末に学期間の授業を振り返っていちばん心に残った教材とその理由

* 文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」(110ページ)。

について書くページを設けた(図1)。そして、学期末に振り返る際には、教員が撮りためた板書の画像を電子黒板に映し、「この教材では、こんな話をしたよね」と言って子どもに授業を思い起こさせてから、「自分の心に残っているのは何かな?」などと問いかけている。子どもも、自分の「道徳ノート」を読み返すことで、学期全体で学んだことや自分の心の変化などを振り返ることができている。

担任の願いや授業の目標を保護者向けの指導案で共有

「道徳ノート」には、保護者のコメ

ント欄も設け、子どもが保護者からの評価も受けられるようにした。保護者のコメントは必須とはしていないが、教員のコメントを読み、子どもに問い返して一緒に考えを深めていく保護者も多いという。

さらに、保護者と評価を共有するための重要な場が、毎年行う道徳科の公開授業だ。当日は、担任の願いや授業の目標などが書かれた保護者向けの指導案を用意し、配布。保護者は指導のねらいを理解した上で、わが子の学習状況を見取る。そうすることで、担任の子どもへの評価も納得できるようになるという。

「保護者や地域には、道徳科の目標

を学校便りや地域の会合などで折に触れて説明するようにしています。家庭と地域と学校が同じ方向性を共有してこそ、道徳教育の目標は達成できると考えています」(森本校長)

2017年度からは、同校の「道徳ノート」を寝屋川市のすべての公立小・中学校が活用。さらに、同校の中学校区では、小・中学校が合同で道徳教育の公開授業を行い、地域の足並みがそろった道徳教育を展開している。

算数科での学習評価

学期末に行うテストで活用力を測る

算数科では、2011年度から実践研究を行っている。2012年度からは研究主題を「つながり高まる算数」とし、発表・交流活動を中心とした問題解決型学習を行った。そして、2017年度からは、新学習指導要領で示された「数学的な見方・考え方」に結びつく言葉、図、数、式、表、グラフを相互に関連づけた活動を軸に、実践研究を進めている。

年3回実施する研究授業は、学年縦割りのグループで行う。例えば、2年生の研究授業には、2年生担任のほかに、高学年・中学年から各1人が加わり、指導案を検討する。校内研究推進部部長の竹内寿康先生は、その理由を次のように説明する。

「例えば、5年生で学習する小数÷小数の計算でつまずく子どもは、4年生の小数÷整数でわり算の概念を理解できていないなど、学習内容は学年を超えて関連しています。6年間を系統的に捉えた授業づくりができるよう、研究授業は異学年混合としました」

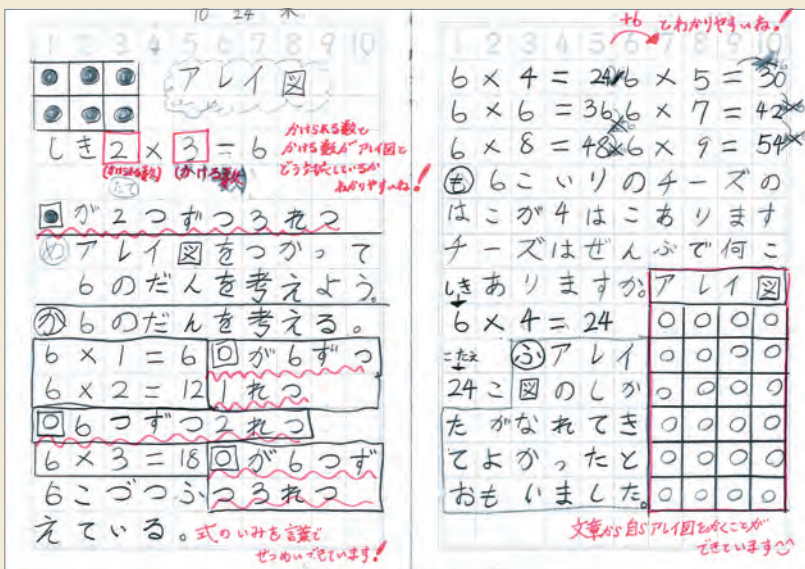
新学習指導要領で評価の観点点が3つに整理されたことを受け、算数科では2017年度から思考・判断・表

図2 道徳科 評価の観点の一覧

評価の視点	評価のポイント	前半…大きくりの評価	
一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか	道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉えようとしている。	様々な価値について、何が大切であったか、一つ一つの価値について、大切なことを、自分が大切にしたいと感じたことについて、(道徳的価値)について、自分の言葉で学習のキーワードを見つけ、道徳的な問題点や良さ気付き、自分の価値観を広げ、新しい見方を取り入れ、新しいたくさんの気づきを、	自分なりの言葉で表すことができました。(道徳ノートに)書いていました。自分の考えを言っていました。
	自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている。	(道徳の)学習を通して、道徳の学習において、道徳で学習した内容を、それぞれの学習を、人生についてよく考え、	発言していました。発表していました。自分の考えを発言していました。自分の思いを発表していました。
道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか	複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている。	友だちと考えを交流する中で、考えを発表し、交流する中で、	話し合っていました。うなずきながら聞いていました。
	読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。	読んだことと自分の考えを交流する中で、考えを発表し、交流する中で、	学習に取り組むことができました。学習することができました。
	現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを捉えていることがうかがえる部分に着目している。	友だちと考えを交流する中で、考えを発表し、交流する中で、	学習に取り組むことができました。学習することができました。
道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか	道徳的な問題に対して自己の取り得る行動と他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている。	友だちと考えを交流する中で、考えを発表し、交流する中で、	学習に取り組むことができました。学習することができました。
	道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしている。	友だちと考えを交流する中で、考えを発表し、交流する中で、	学習に取り組むことができました。学習することができました。
後半…具体的な学習状況			
<記述や授業中の発言から顕著な部分を抜き出せる場合>	「(主題名、内容項目)」について考える学習では、「(教材名)」(の学習)では、	<p>～と、(価値)の大切さに関心し、道徳ノートに書いていました。</p> <p>～と、(価値)の良さや大切さについて発言していました。</p> <p>～という経験を振り返り、そのすばらしさについて書いていました。</p> <p>～という思いを道徳ノートに書き表していました。</p> <p>～というすばらしい思いを発表することができました。</p> <p>～と自分が大切にしたいものを見つけ、道徳ノートに書いていました。</p> <p>～と今の自分にできることを見つけて、道徳ノートに書き表していました。</p> <p>～と、前向きに生きていこうとする意欲が書かれていました。</p> <p>～と登場人物に強く共感したことを発表していました。</p> <p>～という○○さんの考えに、たくさんの児童がうなずいていました。</p> <p>～という○○さんの考えを発表し、意見を交流していました。</p> <p>【授業中の様子から】</p> <p>友だちの意見に関心を持って聞くことができました。</p> <p>(道徳的価値)の大切さについて、深く考えることができました。</p> <p>【ペア・グループ活動での様子から】</p> <p>(道徳的価値)について、友だちの話を聞いて改めて考えることができました。</p> <p>友だちの考えをよく聞いて、(道徳的価値)の良さに関心することができました。</p> <p>【役割演技や動作化での様子から】</p> <p>登場人物の行動を体験することで、(道徳的価値)のすばらしさに気付くことができました。</p> <p>登場人物になりきって演技することで、登場人物の心情について考えることができました。</p>	

*石津小学校提供資料をそのまま掲載。

図3 子どもの算数のノートと教員の見取り(例)



思考などを見取るために、子どものノートを定期的にチェック。上記のノートは、図と式と言葉が関連づけられている点や、式に「→+6」と書き加えられている点に着目し、言葉と図が関連して説明の根拠となり得ていると評価し、コメントを記入した。また、右の写真のように、子どもにお手本にしてほしいノートを廊下に掲示し、子ども同士で学び合えるようにしている。

*石津小学校提供資料をそのまま掲載。



現を評価するための学校独自の「説明力テスト」(現在は、「活用力評価テスト」)を、学期末に行うこととした。問題数は1~2問程度とし、1回15分程度で解答できる量だ。学年ごとに子どもがよくつまずく単元や活用力を試してほしい単元を選定して、文部科学省「全国学力・学習状況調査」や寝屋川市の学習到達度調査などの問題を基に作成している。

『全国学力・学習状況調査』等は、子どもに身につけてほしい資質・能力の指針となるものであり、良問がそろっています。『活用力評価テスト』はその要素を取り入れた問題とすることで、教員の作問の負荷を減らすことも目指しました(竹内先生)

教員自身が問題を作り、学期末までに子どもに身につけさせたい資質・能力を明確に意識することによって、

単元の目標から逆算して授業づくりをする考え方も浸透してきたと、竹内先生は指摘する。

「単元の到達度を測る問題を教員が自ら考えることで、普段の授業でも思考力や表現力などの育成を強く意識した指導ができています。子どもが思考・表現する場が増え、子どもの授業ノート(図3)を見ると、考える習慣が身につけてきているのを感じます」

さらに、森本校長は、「活用力評価テスト」の意義を次のように語る。

「日々の指導では、授業を進めることに集中しがちです。そうした中、何のためにその教育活動を行うのかを見失わないように、目標を再確認することが重要です。学期末に行う『活用力評価テスト』は、そうした場にもなっています」

「活用力評価テスト」の実施後は、子どもの解答の傾向や正答率などを学年団や校内研究推進部で分析し、指導改善や研究授業に生かしている。

2020年度に向けて

評価検討委員会で 新年度までに指針を提示

今後の課題は、2020年度の学習評価の方針を示すことだ。現在進めている教育課程の編成や学校行事の年間計画の立案を終えた後、各学年の代表1人と、校内研修部、管理職から成る「評価検討委員会」で、年度内に評価方針を打ち出す予定だ。

「本校のこれまでの研究成果や本年度の成果と課題を、国立教育政策研究所から出される指針や教科書とすり合わせて、本校の学習評価の方針を検討し、さらに校内で共有して、4月の新課程全面实施を迎えたいと考えています」(森本校長)

「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、道徳科の評価と同様に、教員の主観に左右されずに評価するにはどうすればよいか、評価の材料をどのように集めるのが課題になると、森本校長は語る。

「振り返りの質の向上が、『主体的に学習に取り組む態度』の評価の鍵になると考えています。感想にとどまらない振り返りを子どもが書けるようにし、次の学びにつなげていくためには、どのように指導すればよいか。道徳科の実践研究を参考に、子どもの書いた振り返りを教員間で共有し、まずは子どもの内面を見取る力を高めていきたいと思えます。そうした指導改善によって学習評価も日々進化を遂げるものであり、指導や評価に完成形はありません。これからも目の前の子どもの成長に資するよう、不断の努力をしていきたいと思えます」

自主的学習を軸にした授業で、子どもが自ら学習改善を図れる学習評価を目指す

神奈川県 横浜市立白幡しらばた小学校

神奈川県横浜市立白幡小学校では、2018年度に、観点別学習状況評価を4観点から3観点へと移行させた。約10年にわたり実践研究を積み重ねてきた「自主的学習力」を育成するための評価手法を生かして、子ども自身が学びを振り返り、次の学びに生かす力を高めている。



© 1936年、横浜市白幡尋常高等小学校として開校。アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業改善と、カリキュラム・マネジメントを通じた組織改善を推進している。

校長 鈴木秀一先生
 児童数 726人
 学級数 26学級（うち特別支援学級4）
 電話 045-401-4779
 URL <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/shirahata/>



校長
鈴木秀一
すずき・しゅういち

同校に赴任して2年目。



主幹教諭、研究主任
玉置哲也
たまき・てつや

同校に赴任して8年目。

目標・指導・評価の一体化に向けて

学習評価を充実させる鍵は 目指す子ども像の共有

閑静な住宅街に位置する神奈川県横浜市立白幡しらばた小学校は、家庭や地域の教育力が比較的高い環境にあり、子どもの学習態度も落ち着いている。同校では、2008年度から継続して、子どもが自ら問い、自己選択・自己決定をしながら学びを進める「自主的学習力」を育む実践研究を進めている。

2018年度には、学習評価を4観点から3観点へと移行させた。研究主任の玉置哲也先生は、その理由を次のように説明する。

「観点別評価が育成を目指す資質・能力の3つの柱と対応する形で整理されたことで、教員が指導のねらいをより意識しやすくなったと感じました。そこで、移行措置の段階で3観点を採り入れることにしまし

た。1年間実践してみて、学習評価を授業やカリキュラムの改善に生かしやすくなったと思います」

学習評価において同校が大切にしているのは、学校教育目標や目指す子ども像を全教職員で共有することだ。2018年度は、夏季休業期間中に全教職員で、自分たちが育成を目指す子どもの姿を話し合った。学校教育目標の「たくましく生き抜いていく子ども」とは、具体的にどういった姿なのか、教員一人ひとりが考えを述べ合い、それらを整理した。そして、2019年度に育成を目指す子ども像を、「挑戦する子」「受け入れる子」「判断実行する子」「目標を立てられる子」「やりぬく子」の5つに具体化した。

「学習評価は、子どもが自ら学習改善を図れるように行うべきだと思います。評価によって、子どもは次は何を学ぶべきかが分かること、教員はそのためにどういった手立てを行えばよいのかを把握できることが重

要です。その際に学校教育目標が明確でなければ、教員の評価の足並みがそろいません。教員全員で話し合い、目標を明確にして共有することは、適切な学習評価を策定するために必要不可欠であると考えました」（玉置先生）

鈴木秀一校長は、そうした教員間の対話は、子ども観や授業観、教育観をすり合わせる場として価値ある取り組みだと強調する。

「自校の目指す子ども像と、それを具現化する授業のイメージを共有することで、新しく赴任してきた教員も、指導と評価の足並みをそろえることができます。数年で教員が入れ替わる公立学校であるからこそ、対話は非常に意義深いと感じています」（鈴木校長）

2019年度は対話の場を日常的に

持とうと、事務連絡を電子掲示板で共有するなどの工夫をして時間を捻出し、月1回の職員会議を教員の対話の場とした。「自主的学習力」を身につけた子どもとはどのような姿なのか、思考が深まる言葉のやり取りとはどういった対話を指すのかということを、ワールドカフェ方式*1で約1時間話し合う。そして、自身の気づきをワークシートにまとめ、学校のサーバー上で全教職員が共有している。

主体的に学習に取り組む態度の育成と評価

既知と新知の言語化により、自身の単元目標を持たせる

同校では、子どもが自ら学習改善を図れるように、学習の動機づけと学習過程の整理を行うための思考ツール「K・W・Lチャート」を用いている。K・W・Lは、それぞれ「Know(既知)」「What(新知)」「Learn(学んだこと)」を意味する。具体的な授業の進め方は、次の通りだ。

まず単元を始める際に、単元や教材に関して既に知っていること(K)、これから知りたいこと(W)を子どもに挙げさせて、模造紙に書き出す。目標を明確にした上で、その達成のためにはどうすればよいか、子どもと教員が対話しながら学習計画を立てる。そして、学習が進む中で「W」

から「K」へと移行したものは、学んだことの「L」の欄に記入する(写真1)。

そのように、単元の冒頭に学習目標や学習プロセスの見通しを持たせ、また学習の途中でも既知と新知を整理することで、子どもは主体的に学習に取り組めるようになる。教員はそうした子どもの姿を見取り、評価をしている。

そして、この「自主的学習力」の評価を、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に生かしている。

『「K・W・Lチャート」』の作成を通して、子ども自身が単元における自身の目標(W)を持ち、その達成に向けて試行錯誤を繰り返しながら、粘り強く学ぶようになります。さらに、目標に対して今はどの段階か、次に必要な学びは何かを見極め、実行する中で、自己調整力もついてきます。つまり、『自主的学習力』には、『主体的に学習に取り組む態度』の2つの側面である『粘り強く取り組む』と『自己調整』が含まれているのです。そこで、『主体的に学習に取り組む態度』の評価に、これまでの研究成果を生かしています(玉置先生)

なお、低学年では「K・W・Lチャート」を使わない場合もあるが、その際も単元や授業の初めに目標(W)を明らかにするとといった考え方は同じだ(写真2)。

子どもの振り返りも3観点を意識させる

「自主的学習力」の育成・評価に向けて、同校ではどの単元も第1～3次の3段階に分け、各段階の意図に応じた指導の工夫をしている。

1～2時間目の第1次では、「K・W・Lチャート」の作成を通して子どもの「W」と「K」を明確化し、学習計画を立てる。ここでは、子どもの「W」をより具体化させるために、外部講師を招くことがある。例えば、6年生の国語の単元「プレゼンテーションを学ぶ」では、プレゼンテーションの専門家に招き、その手法を見せることで、理想のプレゼンテーションに近づくために必要なことを具体的にイメージさせた。

3～9時間目の第2次は、第1次で立てた学習計画を実行する段階で、自分たちが挙げた「W」を学んでいく。教員の講義形式ではなく、課題について子どもが調べ学習をしたり、話し合ったりする活動が中心となる。

そして、10～12時間目の第3次では、自身の学びを振り返って学習内容をまとめる。その際、「K・W・Lチャート」の「W」に挙げた内容が達成でき、「L」に移行できているかを重視することに加えて、3観点的評価規準を意識して振り返るように子どもに促している。

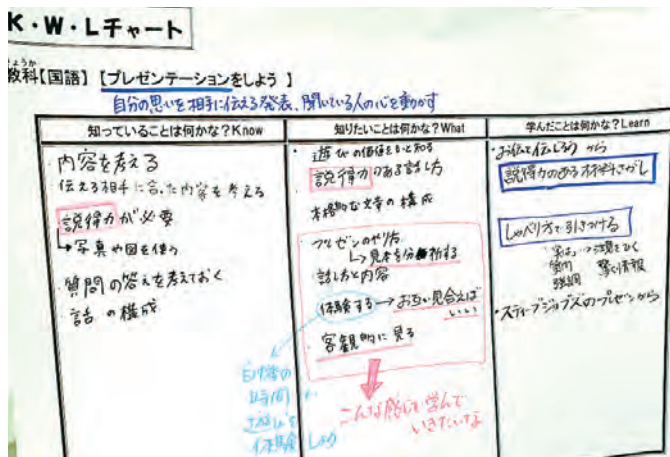


写真1 6年生の国語「プレゼンテーションをしよう」の単元では、「K・W・Lチャート」を用いて、知りたいことに「説得力ある話し方」「プレゼンのやり方」などを挙げた。



写真2 2年生の国語では、異学年交流会で1年生が楽しめるように「お話クイズをする」とこととなり、楽しめるクイズをつくるための方法をみんなで考えた。写真は、その方法を黒板に書いてあるところ。

*1 話し合いの手法の1つ。参加者が小グループに分かれて話し合った後、指定の時間になったら各グループ1人を除いて、新しいグループを構成し、同じテーマで話し合う。その際、残った1人が前のグループで話し合った内容を新たなメンバーと共有する。そうしたグループワークを繰り返し、最後に最初のグループに戻って、それぞれが話し合った内容を共有する。

「振り返りの場面で、教員が『授業で分かったことを書きましょう』と言うと、子どもは知識・技能の部分だけを振り返りシートに書きがちです。しかし、3観点で評価するのならば、子どもにもその3観点で自身の学習を振り返らせなければ、その観点によって得たことをメタ認知できません。そこで、『めあてを達成するために、○○のラーニングスキル^{*2}を活用していたのがよかったね』『仲間と話し合いながら目標に向けて頑張ったことが重要だね』などと、教員の声かけによる価値づけをするようにしています」(玉置先生)

目標・指導・評価を一体化させるためには、教員の評価だけでなく子どもの自己評価にも、3観点を取り入れていくことが必要だと言える。

単元ごとに3観点を評価する工夫

単元のどこで何を評価するか 単元計画に場面と方法を明記

単元ごとに3観点での評価を行うための工夫として、指導案には単元の評価計画を具体的に記している。単元計画の冒頭に、単元の評価規準を3観点で明記し、「単元の指導と評価の計画」と「本時展開」には、具体的な評価規準を3観点の評価規準と関連づけるように記述。併せて、評価方法も記している。

その具体例を、6年生の国語の「登場人物の相互関係に着目して『ゲームのストーリー』を作ろう」(図2)で見よう。単元の評価規準の「ア 知識・技能」で設定された内容は、単元計画の第2次の評価規準では、「話の展開と登場人物の相互の関係などの表し方を理解した上で、図や語句を適切に使って表している」とし、評価方法を「発言の分析、ワークシートの記述の分析、振り返りの記述の分析」としている。そして、具体的

図2 単元の指導案における、評価規準と評価方法の示し方(第2次の例)

2 単元の評価規準		ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
	1	物語の展開と登場人物の相互関係などの表し方を理解した上で、図や語句を適切に使って表している。	「B 書くこと」 1 想像したことを書き表すための筋道の通った展開となるように、文章全体の構成や展開を考えている。 2 目的や意図に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。 3 文章全体の構成や書き表し方に着目して、文や文章を整えている。	1 学習の見通しをもち、登場人物の相互関係などを図や語句を使って書き、自ら進んで文章全体の構成を考えたり、目的や意図に応じて書き表し方を工夫したりしながら書き、友達と書いたものを読み合ったり構成や書き表し方を整えようとしている。
5 単元の指導と評価の計画(全10時間)				
次	時	学習活動	指導の手立て(○)	評価規準(評価方法)
関連	開	○総合的な学習の時間でゲームクリエイターの話を読み、ゲーム作りの手順について取材する。 ○ゲームのコンセプトと関連付け、想像を広げて考える必要があることを理解する。 ○自分が作りたいゲームのコンセプトやゲームの展開の構成を話し、前後の展開を考えた上で自分が担当する事件とその解決について考える。	○ 同じコンセプト(テーマ)やゲーム形式を選択した児童同士でグループを組み、対象とする相手を決めておく。	○ 事件や出来事を一人一つ担当する。大まかな構成をもとに、自分が担当する順序を決め、前後の展開と関連付けながら考えるようにする。
	連	○自分が作りたいゲームのコンセプトやゲームの展開の構成を話し、前後の展開を考えた上で自分が担当する事件とその解決について考える。 ○大まかな構成と人物の相互関係を関連付けながら話し合う。 ○人物の相互関係を関連付けながら、具体的な話の展開を決めていくようにする。		○ 登場人物の相互関係を話し合う。大まかな構成をもとに、自分が担当する順序を決め、前後の展開と関連付けながら考えるようにする。 アー1 話の展開と登場人物の相互関係などの表し方を理解した上で、図や語句を適切に使って表している。(発言の分析 ワークシートの記述の分析 振り返りの記述の分析) イー1 大まかな構成と関連付けながら、登場人物と登場人物の相互関係を考え、(発言の分析 ワークシートの記述の分析 振り返りの記述の分析) ウー1 登場人物の相互関係図をもとにグループで話し合い、プロットをまとめる。 アー1 話の展開と登場人物の相互関係など
7	本	○人物の相互関係を関連付けながら、具体的な話の展開を決めていくようにする。		
8	時	電話のテーマ、話の展開、登場人物、登場人物の相互関係		
7 本時展開(7/10)				
		学習活動	指導の手立て(○)	評価(評価方法) ラーニングスキル(★) 思考操作
た	1	学習計画表を活用して、本時の学習課題を確認すると共に、学習の見通しをもつ。	○ これまでの学習で繰り返していることでは、児童自身で進められるように支援する。	
し	2	教師が、これまでに学習した、物語の展開と人物の相互関係についてまとめたラーニングスキルを提示し、人物の相互関係に着目しながら、話の展開を決めるという本時の学習を確認する。	○ 本時で何を話し合うかを確認し、協働的に課題を解決できるようにする。	
か	話の展開と関連付けて、登場人物や登場人物の関係性を改善しよう。			
め	3	課題についてグループで話し合う。	○ 物語を分析する際に使ったポイントシートや、人物相互関係図のラーニングスキルを参考にして話し合う。	★登場人物が生きる「ゲームのストーリー」の作り方 展開と登場人物の特徴が関連付けられているかという視点で見合い、グループでまとめている。
る	①	自分が書いた話の展開の意図を伝える。	○ 話し合いがスムーズに行えるように、同じグループの友達が書いた事件とその解決の仕方について読んでおき、グループで話し合えるようにする。	関連付ける 展開と関連付けて登場人物や登場人物の相互関係を決めている。
	②	『冒頭部』から『結び』までを俯瞰し、それぞれの展開の中でどのように登場人物の相互関係が変化するかを考える。		
	③	登場人物の相互関係に着目しながら、全体の展開を決める。		
ま	4	他のグループの展開を読み、よい点を称赞したり、課題について伝え	○ アドバイスをもらったことをもとに、グループの展開	アー1 話の展開と登場人物の相互関係などの表し方を理解した上で、図や語句を適切に使って表している。 イー1 大まかな構成と関連付けながら、登場人物と登

「2単元の評価規準」で、知識・技能を「ア」、思考・判断・表現を「イ」、主体的に学習に取り組む態度を「ウ」とし、「5単元の指導と評価の計画」や「7本時展開」では、その評価規準をさらに具体化し、対応する記号をつけて記載することで、何を評価するのかわかりやすく示している。

*白幡小学校提供資料を基に編集部で作成。

*2 同校が、学年間や教科間を貫く汎用スキルと、各教科固有のスキルを、カリキュラム・マネジメントの視点で整理して関連性を示したものの。

な評価の場面を、本時展開の**評価（評価方法）**の中に明記している。

最終的な学習評価は、授業中の見取りに加え、ワークシートや振り返りの記述、子どもへの聞き取り、ペーパーテストなど、複数の組み合わせの結果から総合的に判断する。

玉置先生は、学習評価を一気に変えようと気負わない方がよいと語る。

「毎授業ですべての子どもを3観点で評価することには、無理があります。重要なのは、教員が自分なりの評価計画を立てることです。例えば、体育科ではよくチームで活動しますが、1時間で全チームを評価しようとするのではなく、『今日はAとBのチームを確認しよう』と決めるのです。それは、ほかのチームを一切見ないということではありません。子どもの学びが自然に見えてきた時に、その姿を評価すればよいのです」

文部科学省が示した「新しい学習指導要領等が目指す姿」には、主体的な姿勢には「思いやりなど、人間性等に関するもの」が含まれている。そうした人間性等も、教員の声かけによって教科指導の中で高めることができると、玉置先生は語る。

「例えば、グループのメンバーをサポートしたり、クラス全員で協力したりする子どもの姿を、教員が積極的に評価すれば、子どもは協働性の大切さに気づくでしょう。教員が子どもの姿をつぶさに見取することで、人間性は一層育まれていきます」

カリマネの視点での授業づくり

外部専門家の客観的な指摘がカリマネの質を高める

同校が考える、学習評価の質を向上させる鍵は、2つある。

1つは、学年間や教材間を貫く汎用スキルと、各教科固有のスキルを、カリキュラム・マネジメントの視点

で整理して関連性を示すことだ。同校ではこれを「ラーニングスキルリスト」と名づけ、評価の場面で活用している。例えば、「言語能力」は、算数科では「記録」、社会科では「プレゼンテーション」などが当てはまる。それらを必要に応じて活用している姿を、思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度の評価と結びつけている。

もう1つは、実践研究のアドバイスを行う外部の専門家が存在だ。同校には、元文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の井上一郎氏が、アドバイザーとして10年以上かかっている。

「全国の様々な学校の実践を見ている外部の専門家から客観的な指摘を得られることで、本校では10年以上も教育方針を貫くことができている。現在、井上氏は、年に5～6回来校し、教育動向についての解説や、教員個別に指導案の書き方のアドバイスなどをしてもらっています。外部専門家の見識に触れることで刺激を受け、先生方にも意欲の高まりが見られます」（鈴木校長）

3観点評価の今後に向けて

評価の3観点化で期待される教員の役割の転換

約10年にわたり子どもの自主的学習を進めてきた同校では、教員の役割としてファシリテーションの比重が大きくなっているという。今後、3観点での評価が定着することで、ティーチングの比重はさらに下がり、指導の意識転換がさらに進むだろうと、玉置先生は指摘する。

「教員の役割には、**ティーチング**（指導）、**ファシリテーション**（支援）、**コーディネート**（調整）があると思います。その中で、**ファシリテーション**は、従来のように知識・技能を教員が一

方的に教えるのではなく、学習が停滞している子どもを支援するというイメージで捉えています。たとえば言うなら、階段の踊り場で『このまま上って行って、ゴールにたどり着ける？』と声をかける役割です。目標を達成できるよう、問い直したり、学び直しを促したりしながら、子どもの主体的な学びを実現させていくことを目指します」

コーディネートは、学習環境を整備することだ。同校では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の進め方として、まず1人で学び、グループで学び、全体で考えを深めるという流れを基本としている。「ここはペアで深めた方がよい」「最初からグループで話し合わせた方が効果上がりそうだ」など、子どもの実態に応じて判断するのが、コーディネーターとしての教員の役割だ。ほかに、外部講師をどのタイミングで招くかの判断も、教員の役割となる。

指導と評価の再編に際して重要な点を、鈴木校長はこう語る。

「教員は、つい『先に知識や考え方を教えておけば効率的だ』と思いがちですが、子どもの中で課題が明確になってから、その解決に向けて学び、振り返り、学習方法を改善していくことで、学習の質は上がっていきます。そのように、子どもが主体性を持って学ぶ仕組みを校内に整備することが、校長としての私の役目です。子どもの学びも教員の学びも、基本的には同じです。教員が課題意識を持ち、主体的に新たな指導法や評価方法を学ぶことが重要だと考えています」

3観点の評価への移行により、教員には子どもの主体的な学習をより後押しする役割が求められている。その実現に向けて、学習内容の精選や教科横断の学習を進めるためのカリキュラム・マネジメントがより重要になっていくだろう。

めあての提示や振り返りの工夫で、子どもが自ら学ぶ力を育む

九州大学大学院 人間環境学研究院 准教授 **伊藤崇達**

学習評価の新しい3観点の1つである「主体的に学習に取り組む態度」では、学習に関する自己調整（自己調整学習；self-regulated learning）にかかわるスキルが重視されている。その基本的な考え方と、授業づくりのヒントについて、九州大学大学院の伊藤崇達准教授に聞いた。

自己調整学習の3要素 メタ認知・動機づけ・学習方略

「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、国の通知では、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を身につける学習において、「粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとしているかどうか」をポイントに挙げています*1。この、「自らの学習を調整しよう」とする学習を、教育心理学では「自己調整学習」と呼びます。理論的には、**メタ認知・動機づけ・学習方略**の3つの要素（図1）を、学習者自身が能動的に進めていく学習を指します。言い換えれば、この3つの要素を備えていると「自己調整学習ができています」状態だと考えられます。心の内にあるメタ認知と動機づけを両輪として駆動させ、主体性を発揮して学習方略の実行をしていくイメージです。

メタ認知が発達するのは、小学校高学年からと言われていますが、その土台は幼児期や小学校低・中学年から築かれます。幼児期の遊びやお手伝い、小学校低・中学年における基本的な学習方略を用いた学びを繰り返し、目標を実現する経験を積み重ねることで、その後のメタ認知が発達していきます。

子どもが予見・遂行・省察を回す、教員の働きかけとは

自己調整学習をうまく進めるためには、**予見・遂行コントロール・自己省察**の3つのステップを回していくことが重要です（図2）。

予見（見通し）とは、学習の下準備にあたり、目標設定や学習方略の計画を行うプロセスです。課題への関心や自己効力感も必要となります。

遂行コントロール（深め進める）と



いとう・たかみち
京都教育大学教育学部准教授等を経て、現職。博士（心理学）。専門は教育心理学、教授・学習心理学。主著に、「学生を自己調整学習者に育てる：アクティブラーニングのその先へ」（共同監修・翻訳、北大路書房）、「自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術」（共著、北大路書房）など。

は、学習方略を行う中でうまく学習できるよう集中したり、順調に進んでいるかを観察したりするプロセスです。

自己省察（振り返り）とは、学習後に成果の自己評価を行うことであり、成功も失敗も自分の行動の結果として受け止めます。ここで学習方略の問題点に気づけば、次の学習の予見（見通し）に反映させることで、学びのサイクルが成立します。

この3つは、個別には既に多くの先生が実践していると思います。授業のめあてを示す、問題の解き方を

図1 自己調整学習の3つの要素

学習方略 「認知」と「情意」の両面がある。認知的方略は、学習内容を理解するためにまとめたり関係づけたりする、記憶や思考に関する方略。情意的方略は、やる気のない時や学習がうまく進まない時にどう気持ちを立て直し、学習し続けていくのかなど、意欲にかかわる方略。

動機づけ 心理学において、行動を起こさせ、維持し、方向づけ、収束するまでの過程全体。自ら学習活動を進めるためには、「仕方なく」「やらされて」という外発的動機づけだけでなく、「大切だから」「自分がしたいから」「面白い」などの内発的動機づけが必要。単に漢字の読み書きができるだけでなく、そこに楽しさや意義を認め、価値を実感できた時、強固な内発的動機づけとなる。

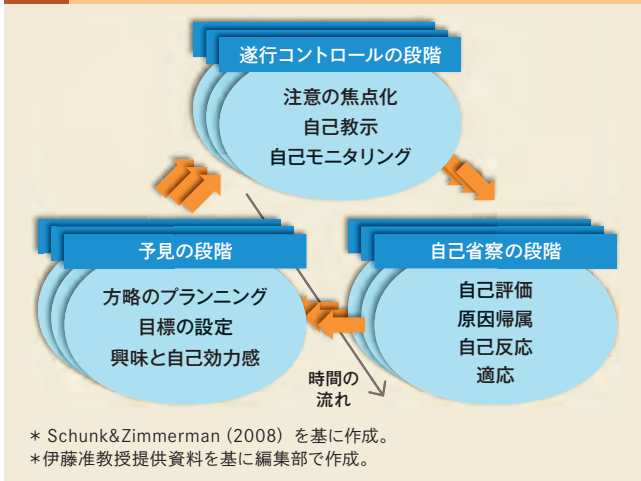


メタ認知 学習計画を立て、進み具合をチェックし、その結果を評価するなど、自分の学びがうまく進んでいるかどうかを観察し、自分で調節していくこと。

*伊藤准教授提供資料を基に編集部で作成。

*1 2019年3月29日付「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」。

図2 自己調整学習の循環的・らせん的なサイクル



教える、学習内容を振り返らせるといったことです。それらを、学習のサイクルとして回し続けることを意識して指導すると、自己調整学習力がより高まります。

例えば、めあての提示では、学習内容を示す「結果の見通し」に加えて、どのような方法で解決するのかという「過程の見通し」を示したり、一緒に考えたりすることで、子どもはより明確な見通しを持って学習に臨めます。振り返りも、学習のまとめや授業の感想だけでなく、疑問やさらに知りたいことまでを言語化させると、子どもは次の学習を見通せます。

そのように、教員が支援しながら3つのステップを繰り返すことで、子どもに内面化させることで、自己調整力は育まれていくのです。

学びのサイクルを促す 振り返りの工夫

子どもが自己調整学習を行えるよう、類似の問題に直面した時に、それを解決できる活動を授業中に組み込むことも大切です。

その1つである「教訓帰納」^{*2}という方法を紹介します。それは例えば、解けなかった算数の問題で、正答とその計算式を書き写させるだけでな

*2 問題を解決した後に、その問題をやったことで何が分かったのかを学習者自身が抽出すること。

く、なぜ解けなかったのかも子ども自身に考えさせ、書き出させるといった方法です。自分の間違いを明らかにして教訓とし、内容だけでなく学習方略まで意識させるといった方法です。「誤解」「正しい概念、解き方」の双方を認識することは、同じ間違いを繰り返させないことにも効果があります。

協働学習の振り返りでは、他者との意見交換を踏まえて、自分の意見と対立する意見を書き出し、対比させる「対話的な振り返り」を行うこともお勧めです。1つの事象を多様な視点から省察することで、メタ認知を高めることができます。

なお、振り返りは、最後に行う「総括的振り返り」のほかに、学習の目標や進め方、必要な前提知識など、学習の見通しをつかむための「診断的振り返り」、学びの途中に達成状況と次にすべきことを考える「形成的振り返り」があります(図3)。通常、診断的・形成的振り返りは、教員の発問や見取りによって、教員自身が子どもの状況を把握することで行っています。しかし、教員主導の学習だけでは、子どもはやらされている感から、受け身の姿勢が強まりかねません。子ども自身が診断的・形成的振り返りを行う機会を計画的に組み込むことがあってもよいでしょう。

図3 評価論を踏まえた3つの振り返り

振り返りの種類	振り返りの内容
診断的 振り返り	これから学習に向かう見通しとしての振り返り <ul style="list-style-type: none"> 前提となる知識や概念が分かっているか? 学習の目的は? 学習の進め方は?(学習方略の活性化)
形成的 振り返り	学びの途中段階で行う「小さな振り返り」 <ul style="list-style-type: none"> ここまでの達成状況と今後すべきことは? ダイナミックで、学びの進行とともに行われるもの
総括的 振り返り	授業の最後に行う、いわゆる「振り返り」 <ul style="list-style-type: none"> 学習目標を達成したかというチェックとしては有効 しかし、学べなかった時に軌道修正ができない

*伊藤准教授提供資料を基に編集部で作成。

認知特性に応じた 学習方略の使い分け

欧米を中心とした最新の研究成果では、一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導の重要性が注目を集めています。子どもの認知特性には、視覚優位、聴覚優位などの違いがあります。例えば、一斉指導型授業では、耳に入ってくる言語を一つひとつ順番に理解する継次処理が重要になります。聴覚優位の子どもは授業についていけますが、同時処理の方が得意な視覚優位の子どもは、授業を理解できていない可能性があります。

常に個別指導ができなくても、授業のユニバーサルデザイン化を意識した一斉指導の工夫は可能です。教科書を説明する場面で、視覚化・構造化して板書できるところはどこか、スモールステップかスパイラルに展開するのか等、先生方が各教科の本質や学習の意義を理解し、子どもの様子や場面に応じて多様な学習方略を伝えられるようにしたいものです。

日本では以前から、学習意欲に支えられた「自ら学ぶ力」が重視されています。今後も、単にリテラシーを育むだけでなく、生涯にわたって学び続ける力や意欲を育む授業づくりに取り組んでいただければと思います。

プログラミング教育

新学習指導要領では、学習の基盤となる資質・能力の1つに「情報活用能力」が位置づけられ、その一環としてプログラミング教育が必修化された。しかし、教科化はされず、教科書もないため、指導の具体的なイメージが湧かないとの声も聞かれる。そこで、授業づくりのポイントを先進校の実践から探る。

実践校

福岡県 北九州市立門司海青小学校



教諭

高崎 匠

たかさき・たくみ

研究主任。5学年担任。
同校に3年前に赴任してから
本格的にICT教育の
研究・推進を始め、
日々実践を重ねる。

SCHOOL PROFILE

◎ 1995年、2校が統合して設立。校区は門司港、関門橋を臨む門司港レトロ地区の中心部にある。2016年度から北九州市ICTリーディングスクール推進校。2018年度から北九州市プログラミング研究推進事業指定校。

校長 池田 優先生

児童数 288人 学級数 12学級

電話 093-331-1708

URL <http://www.kita9.ed.jp/mojikaisei-e/>

子どもを主体的な活動に導く教材や授業展開に

福岡県北九州市立門司海青小学校は、北九州市教育委員会から研究指定を受け、2018年度から全学年でプログラミング教育の研究実践を進めている。研究主任の高崎匠先生が考える授業づくりのポイントを、5年生の2学期に行った消費者教育の授業を例に紹介する（P.25参照）。

① 子どもの実態に応じた教材・授業展開にする

今回の授業は、「総合的な学習の時間」と「家庭科」の合教科の学習だ。ゲームの「ガチャ」が、人が意図的に開発したものであることを理解し、そのプログラムを変える活動を通してプログラミング的思考を身につけるとともに、課金（消費）の仕組みについて考えるねらいがある。

「資料や映像を見せるだけでは、子どもは課金の仕組みをつくった開発者の視点を持ってません。自分でプログラムを変える経験をしたからこそ、その仕組みを理解でき、振り返りで消費者の視点に戻った時に、大半の子どもが『ガチャの怖さに気づいた』と書いたのだと思います」（高崎先生）

教材は、学級の実態に合わせて既存の指導案と素材を調整し、1時間の授業で課金ゲームの「消費者」「開発者」の双方の視点で考えさせる構成とした。

「5年生はICT機器の操作に慣れ、『スクラッチ』*も学んでいるため、スムーズに活動できると考え、1時間の配分としました。子どもが機器の操作に慣れていない場合は、消費者と開発者の視点で1時間ずつ授業を行うと、それぞれの立場で深く考えることができます」（高崎先生）

② ICT機器を使う時間を区切り、活動にメリハリをつける

高崎先生は、普段の授業から「3分間でワークシートに書いて」「5分間、話し合おう」などと時間を区切り、気持ちを切り換えて活動させている。子どももその展開に慣れているため、プログラミングの授業でもICT機器を勝手に操作したり、遊んだりすることは起こらないという。

③ ICT機器の不具合、子どもの質問への対応をしておく

事前に対応策をしておくことで、機転を利かせることができる。ICT機器に不具合が起きた際には、予備機と交換し、予備機が足りなければ、1台を2人で使うなどの対応が考えられる。また、子どもからの質問には、例えば「どう改善したいの?」と聞き、子どもに話をさせながら問題を整理させて、自己解決を促す。「子どもが主体的に活動できるよう導くのが教員の役割です。私自身がプログラミングの専門家ではないこともあり、子ども同士で話し合せて解決するようにしています」と、高崎先生は語る。

④ 社会が求める資質・能力を育むのだと捉える

高崎先生は、新学習指導要領で情報活用能力が学習の基盤に位置づけられた意味は重いと受け止めている。

「プログラミング教育の目的は、論理的思考力の育成にあり、ロボットを動かす力の育成ではありません。ICT機器を使わなくても、教員が普段からその育成を意識して指導すれば、それはプログラミング教育の一形態と言えるのではないのでしょうか」（高崎先生）

* マサチューセッツ工科大学（MIT）メディアラボが開発したプログラミング言語学習環境。用途を問わず無料で利用でき、世界150か国以上で使用されている。

5年生 プログラミング教育 授業の進め方と指導のポイント

P : 高崎先生の指導ポイント

- ◎教科 「総合的な学習の時間」と「家庭科」の合教科
- ◎単元 消費生活分野
- ◎使用教材 スクラッチ (ビジュアルプログラミング言語)
- ◎めあて ゲームのガチャは、どんなプログラムになっているのだろう
- ◎授業の展開

・新学習指導要領との関連
 新学習指導要領の「第5章 総合的な学習の時間 第3-2 指導計画の作成と内容の取扱い (9) (前略) 第1章 総則の第3の1の(3)のイに掲げるプログラミングを体験しながら論理的思考力を身に付けるための学習活動を行う場合には、プログラミングを体験することが、探究的な学習の過程に適切に位置付くようにすること。」(小学校学習指導要領 P.182) にあたるものとして計画。

・新学習指導要領との関連
 「小学校プログラミング教育の手引(第二版)」で示されたプログラミングに関する学習活動の分類の中で、「B 学習指導要領に例示されていないが、学習指導要領に示される各教科等の内容を指導する中で実施するもの」に相当。

時間	活動
13:55	先生が、子どもにゲームなどで課金をした経験があるかを質問。
14:00	ペアで30秒間、本時のめあてを話し合う。手を挙げた子どもの中から先生の指名により発表。その言葉を先生が板書し、全員で読み上げる。
14:02	ペアでガチャをして遊ぶ。
14:06	ガチャで遊んで気づいたことを、子どもが発表。
14:10	ガチャをして面白かったこと、怖いと思ったことを、各自でワークシートに記入。
14:14	記入した内容をペアで共有。改めて全員でめあてを言う。
14:15	ガチャのプログラムがどうできているのか、タブレット端末の画面を見ながらペアで確認。先生がプログラムのポイントを示しながら全員で確認していく。
14:20	プログラムをどう変えればお客さんがもっと楽しめるか、ペアで話し合って実際に変えてみる。
14:25	各ペアがプログラムをどう変えたかを共有。ペアのうち1人は説明係として残り、もう1人がほかのペアのガチャで遊ぶ。約2分で交代。
14:30	各ペアの工夫を発表。
14:35	振り返りの3つの視点を電子黒板に表示。それらを踏まえて、各自で振り返りをワークシートに記入。
14:38	数人が振り返りを発表。「今日分かってほしかったのは、ガチャも人が作っているということです」と、先生が授業の意図を改めて伝える。

P 自分に引きつけて考えさせるために、自分が課金を利用した経験を思い出させた上でめあてを話し合う。子どもから出てきた言葉で本時のめあてを設定。

P ガチャで遊んだ経験のない子どももいることを想定して、まずは消費者としてタブレット端末のガチャで遊ばせる。

P 消費者の視点からゲームの開発者の視点に切り換えさせるため、めあてを再確認。

P 1時間の授業で単元を完結させるため、プログラムのどこを変えればよくなるか気づけるよう、ガチャの仕組みを説明。



子どもたちの話し合いで出た発言
 「100分の1だと当たり(自動車)が全然出ないよ。もっと当たりが出るようにしようよ」
 「早めに自動車が出るよう、タコスと入れ替えてみない?」

P 消費者の視点で振り返りをさせることを意図して、3つの視点を掲示。
 ・もっと考えたいと思ったこと
 ・友達とどのようなやり取りがあったか
 ・今後に生かせそうなこと

本時の教材画面

ガチャ

ガチャのプログラム

子どもは、プログラムの数値を変えたり、順番を入れ替えたりしてガチャを改造。

子どもの振り返り

◆ ふり振り返り

今日はいつもと違う工夫、を知りました。レアなアイテムがあまりでないようになってびっくりしました。課金には、面白さやこわさどっちもあるんでどのように使うかを考えてお金を使いたいです。

◎本時の板書

P ワークシートに書いた内容を子どもに発表させ、教科のねらいにつながる点やプログラミング的思考のポイントをクラス全体で共有した。

P タブレット端末の操作で注意すべき点は、子どもがいつでも見られるよう黒板に掲示。

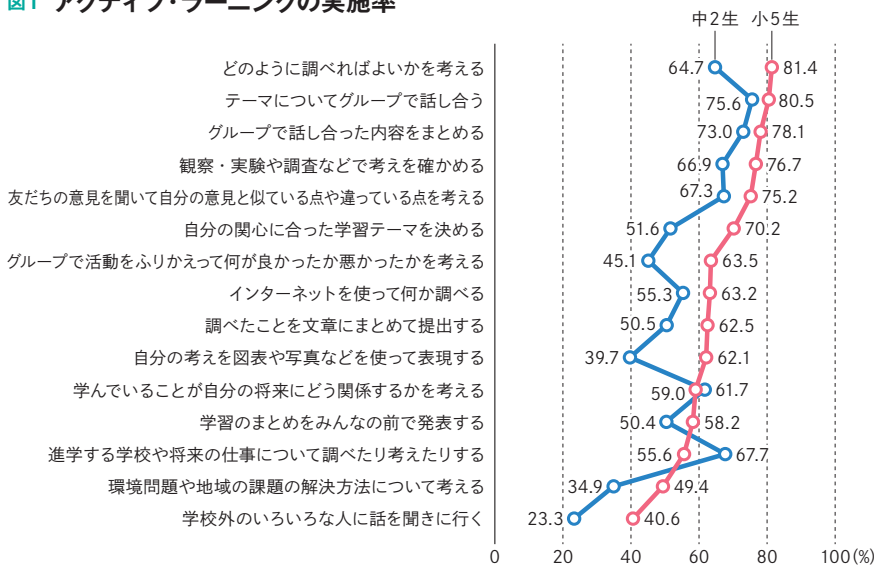
P 「スクラッチ」の画面を拡大して掲示し、プログラミングの改造ポイントを示す。

「主体的・対話的で深い学び」の可能性と課題は？

新しい学習指導要領では、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」が重視されています。その中核を成すのが、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」です。今号では、その可能性と課題について考えます。

1 「主体的・対話的で深い学び」は既に広く実施されている

図1 アクティブ・ラーニングの実施率



注) 「よくする」+「ときどきする」の合計 (%)

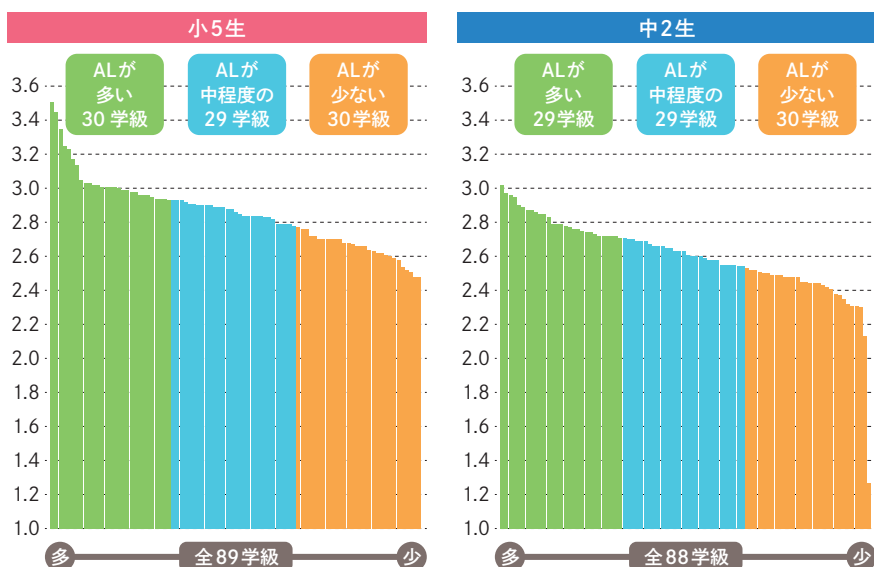
グループ討議は7~8割が「する」と回答

図1は、「主体的・対話的で深い学び」（以下、アクティブ・ラーニング）と呼べる学校での学習活動について、どれくらい行っているかを子どもに尋ねた結果だ。「テーマについてグループで話し合う」「グループで話し合った内容をまとめる」といったグループ討議を伴う活動は、小5生も中2生も7~8割が「する」と回答した。

テーマ決定から、調査・探究、友人との協働、まとめ、表現・発表など、ほとんどの項目で「する」が半数を超えていた。多くの児童・生徒が、既に日常的にアクティブ・ラーニングに類する活動を行っていることが分かる。アクティブ・ラーニングといっても、今までと全く異なる指導が必要なわけではないと言える。

2 取り組みの状況は、学級によるばらつきが大きい

図2 アクティブ・ラーニング (AL) の実施の状況 (学級による違い)



注) 図1に示したアクティブ・ラーニングの実施に関する15項目（1=まったくしない~4=よくする）について、学級ごとに平均値を算出し、多い順番に並べた。

実施率が高い学級と低い学級が存在

しかし、その実施の状況は、学級によって異なる。図1に示した15項目について学級ごとに平均値を算出し、多い順番に並べたのが、図2だ。

例えば、小5生で見ると、数値が最も高い学級は3.51、最も低い学級は2.48だった。調査では「よくする」「ときどきする」「あまりしない」「まったくしない」の4段階で尋ね、それぞれを4点、3点、2点、1点とした。つまり、3.51という結果は「よくする」や「ときどきする」という回答が中心になっていると推測できる。一方、2.48は「ときどきする」と「あまりしない」の中間に位置している。また、「あまりしない」や「まったくしない」という回答が目立つ学級も存在している。

小学5年生、中学2年生、高校2年生を対象に、1990年から定期的に実施している、子どもの学習に関する意識・実態の調査。2015年調査では、小学5年生33校2,601人、中学2年生20校2,699人、高校2年生18校4,426人の協力を得た。

◎本記事の内容に関する詳細は、下記をご覧ください。

●小学校・中学校・高校における「アクティブ・ラーニング」の効果と課題
https://berd.benesse.jp/up_images/research/06_chp0_4.pdf

ベネッセ教育総合研究所
 主席研究員
木村治生

きむら・はるお

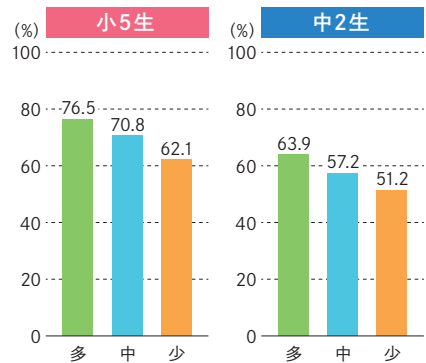
専門は教育社会学、社会調査。乳幼児期から高等教育まで、子ども・保護者の意識・実態や教員の指導に関する調査研究を担当。文部科学省を始め、行政委員や大学講師などを歴任。



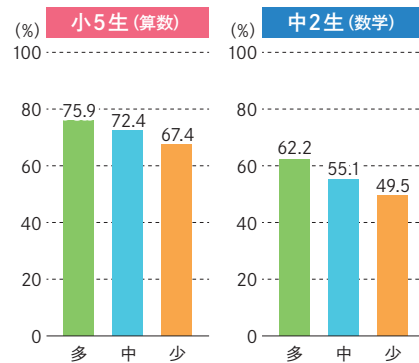
3 アクティブ・ラーニングは関心・意欲を高めるのに有効

図3 興味・関心の広がり(学級ごとのアクティブ・ラーニングの実施程度別)

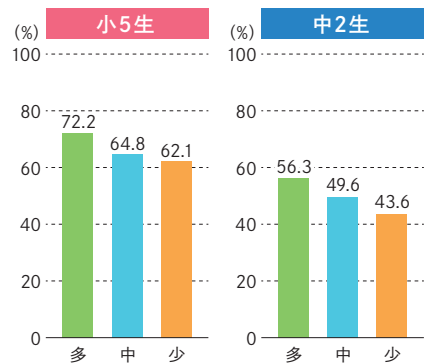
■国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる



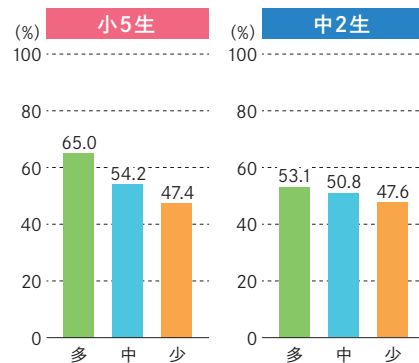
■数学の考え方や解き方を「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる



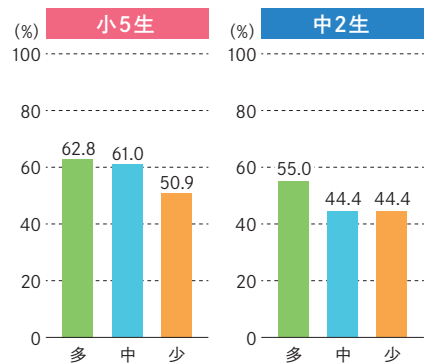
■生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ



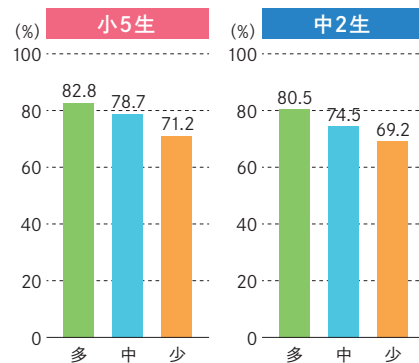
■社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ



■英語を使って外国の人と話したり、手紙やメールなどを書いたりしてみたい



■自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う



注1) 数値は、ALの多い中・小の学級ごとに各設問の関心・意欲が「よくある」+「ときどきある」の合計(%)。
 注2) 「多」はAL活動が多い学級の児童・生徒、「中」は中程度の学級の児童・生徒、「少」は少ない学級の児童・生徒を示す。

アクティブ・ラーニングの可能性

次に、小5生と中2生で、アクティブ・ラーニングの実施が多い学級、中程度の学級、少ない学級の3群に分け、学習意欲への影響を確かめた。図3は、各教科に関連する関心・意欲について「ある」と回答した比率を示している。アクティブ・ラーニングの実施が多い学級の子どものほど、肯定率が高い傾向が見られる。例えば、小5生で「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる」の肯定率は、アクティブ・ラーニングが多い学級と少ない学級で14.4ポイントの差があった。アクティブ・ラーニングが子どもの学習意欲にプラスの影響を与えている可能性がある。

アクティブ・ラーニングの課題

ただ、図2で示した通り学級差は大きく、教員ごとの実施度合いにも差がある。学校による差もあり、どこでも同じようにアクティブ・ラーニングが行われているとは言えない。行政や学校は、指導法を開発する研修を行ったり、教員が指導を見直す機会をつくったりする必要がある。

さらに、アクティブ・ラーニングは、子どもによって効果が異なると推測される。知識・技能は、その習得に必要な学習方法や定着度が分かりやすいが、アクティブ・ラーニングは、資質・能力の身につけ方や成果の測り方が分かりにくい。そのため、幼少期から経験的学習を積み、そこから学んできた子どもにとっては有意義でも、家庭環境に恵まれずそのような活動経験が十分でない子どもには、そこから何を学べばよいのかが理解しにくいと考えられる。そうした違いも意識して、アクティブ・ラーニングに取り組むことが求められるだろう。

島根県 益田市



自転車による
まちづくり*1

萩・石見空港



萬福寺の雪舟庭園

人口

約4万6,000人

面積

約733km²

学校数

市立小学校 15校
市立中学校 10校

児童生徒数

約3,600人*

* 2019年5月1日現在

豊富な歴史遺産を擁する 「ひとが育つまち」

◎万葉歌人である柿本人麻呂の生誕地とされる戸田柿本神社や、室町時代の画僧である雪舟が築いた庭園など、歴史ある建造物を有する。また、行政・学校・企業が一体となって教育活動や地域振興活動などを推進し、地域の未来を担う人材育成を強化している。

電話 0856-31-0100 (代表)

URL <https://www.city.masuda.lg.jp>

市と学校、企業が 連携した取り組みで、地域と ともに「ひとづくり」を推進

「部局・教委・学校を結ぶ役職を 設け、地域を担う人材を育成」

島根県の西端に位置する益田市では、「ひとづくり」を主軸に据えた地域振興施策を推進している。

同市では、県内の他の地域と同様に、人口の自然減と社会減が深刻さを増していた。そこで、2014年、子育て世代やUターン者・Iターン者、さらには、中山間地域への支援の強化を中心とする「益田市人口拡大計画」を策定し、人口減少への対策を本格化。そして、地域の持続的な発展を支えるために「ひとづくり」を強化する方針を打ち出し、「しごと」「未来」「地域づくり」の担い手の育成を目指す「益田市ひとづくり協働構想」を練り上げた。

同構想の実施にあたって重視したのが、行政だけでなく、学校や地域住民、企業が一丸となって「ひとづくり」に取り組める体制の整備だ。例えば、施策を具現化する部署として、市長や副市長、教育長らで構成する「ひとづくり推進本部」を設置した。学校との連携の重要性について、山本浩章市長は次のように語る。

「地域を支える人材を育成するためには、教育現場の理解と協力が欠かせません。そこで、市教育委員会の社会教育課長を『ひとづくり推進監』に任命し、学校を定期的に見て回りながら実態を把握したり、施策の意図を教員に伝えたりするなど、推進本部と先生方の橋渡し役になってもらっています」

「ワークキャリア教育」から 「ライフキャリア教育」へ

「ひとづくり」の施策の中では、社会教育の観点を踏まえて、学校におけるキャリア教育を見直した(図)。以前は職業体験そのものを重視する「ワークキャリア教育」が中心だったが、子どもに自分の生き方を考えさせる「ライフキャリア教育」への転換を図っている。

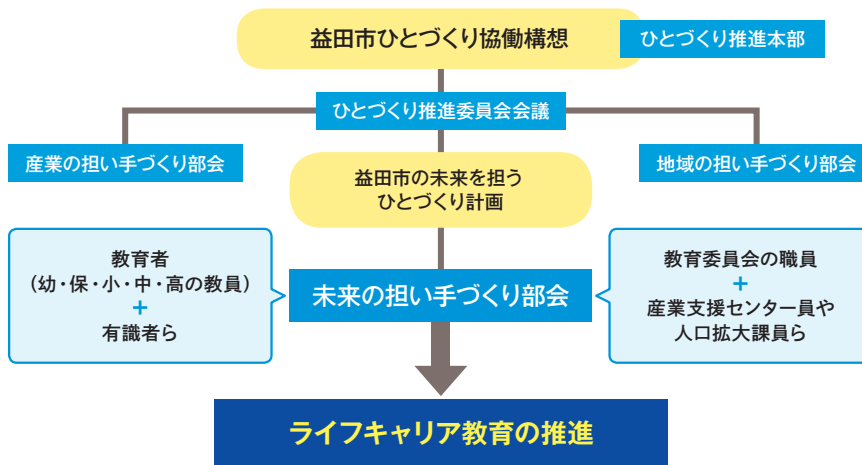
「ワークキャリア教育では、人生に思いを巡らせる前に、職業体験を通じて子どもに就きたい職業を考えさせます。そうした教育を続けていたため、メディアなどを通して馴染みがある都市部の職業を意識させる結果となり、『大人になったら都市部へ出なければならぬ』と思ってしまう子どもを増やしていたと感じます。子どもが多様な自己実現のあり方に目を向け、広い視野で自分の人生を考えられるよう、ライフキャリア教育に力を入れています」(山本市長)

子どもの人生観や職業観を豊かにするために重視するのは、地域の人々との交流だと、山本市長は語る。

「本市の産業や経済、文化などを支える人たちの誇りや思いに直接触れることで、ロールモデルとなる大人が身近にもいることに気づかせたいと考えました。例えば、本市には、都市部から戦略的に顧客を呼び込んだり、都市部で積極的に店舗を展開したりするなど、独自のノウハウで実績を上げている地元企業や商店が多くあります。子どもたちには、そ

* 1 益田市は、2019年、「自転車によるまちづくり」の一環として、2020年東京オリンピック・パラリンピックにおける自転車競技のアイランド選手団のキャンプを誘致した。

図 益田市におけるライフキャリア教育推進の組織図



益田市では、ライフキャリア教育の推進を学校における最重要課題として位置づけ、関連部署の連携を強化。ライフキャリア教育の取り組みを企画する「未来の担い手づくり部会」の委員には、幼・保・小・中・高の教員も加え、現場の実態や要望に応じられるようにした。*益田市発表資料を基に編集部で作成。



市長 山本浩章 やまもと・ひろあき

滋賀県出身。東京大学法学部卒業後、益田市内の企業に就職。日本青年会議所島根ブロック協議会会長などを歴任し、2011年、益田市議会議員に初当選。2012年度から現職(2期目)。

うした地域の魅力や強みを知った上で、人生を思い描いてほしいのです」

ライフキャリア教育の取り組みには、2つの柱がある。その1つは、市内の全中学校が年1回、2～3日の日程で行う「新・職場体験」だ。2年生もしくは3年生が職場体験をする中で、地域の企業で働く人や経営者に、その職業を選んだ理由ややりがいをインタビューし、文章にまとめて発表する。職場体験学習は以前から行ってはいたが、生徒が体験先の人たちとじっくり語り合い、人生観を学べるよう、体験の日数を増やした。また、教員に対しても、学校の夏季休業期間中に地域の企業を見学する「フィールドスタディー」を行っている。教員が地域の企業や経営者を知り、生徒の指導に反映できるようにするねらいがある。

もう1つの柱は、小・中・高で実施している「カタリ場」*2だ。小学生は高校生と、中学生は地域活動に熱心な大人と、高校生は地元企業の社員と、将来の夢や現在の悩み、恋愛、趣味といった多様な話題について自由に語り合う。本来の「カタリ場」は、高校生が大学生と語り合う取り組みとして誕生したものだが、大学

がない同市では、地場産業の強みを高校生に伝えたいという思いもあり、企業と連携することにした。そして、高校での「カタリ場」を参観した小・中学校の教員が、生き生きと話す高校生の姿に感動し、自校にも導入していった。

取り組みが拡大していった要因としては、地域や企業にとってもメリットがあったことが大きいという。

「地域の大人には、『昔からの祭りや行事などを次世代に継承したい』、企業には、『自社の特色を地域の子どものに示し、人材確保につなげたい』という強い思いがあります。本市が行った児童・生徒への調査では、『親と教員以外には、気軽に話ができる大人がいない』という回答が約4割を占めていたように、以前は地域の大人と子どもが思いを伝え合う機会が不足していました」(山本市長)

「小学校は統合せず、地域の拠点として活用」

さらに、「ひとづくり」の施策の一環として、今後、少子化が進んでも、小学校は基本的に統合しないという方針を固めた。その理由は2つある。

1つめは、小学生には、1つの地域という比較的小規模な人間関係の中で、他者とのつき合い方の基本を学んでほしいと考えているためだ。一方、中学生は一步進めて、複数の地域の生徒と交流しながら、自分の世界を広げていくことが大切だとし、中学校の統合は進めている。

2つめの理由は、小学校を教育施設としてだけでなく、「ひとづくり」を支える地域拠点としても重視しているからだ。各校に学校のオープンスペースを地域に開放してほしいと呼びかけた結果、放課後児童クラブを設けるなど、学校の教育活動以外にも子どもが地域の大人と親しく接する場面が増えているという。

山本市長は、同市の今後について次のように語る。

「高校生対象の就職意識調査では、地域の企業に魅力を感じ、卒業後は地域で働きたいと考える生徒が増えています。小・中学校での地域との交流や、高校での企業との『カタリ場』に取り組んできた成果です。今後も、行政・学校・企業が一体となって、本市の『未来』『しごと』『地域づくり』を主体的に担う『ひとづくり』を推進していきたいと考えています」

*2 認定NPO法人「カタリバ」が実施する出張授業。

第7回

長野県塩尻市 学校事務職員との連携

教委と事務職員の課題共有 で実効性の高い施策に

全国に先駆けて、小・中学校の給食会計を公会計化するなど、学校事務の改善を図ってきた長野県塩尻市。2019年度には、従来の学校事務研究会を発展させる形で、教育委員会の委嘱による協議会を発足させました。教育委員会と事務職員がそれぞれの課題を共有することで、課題解決に向けてより実効性の高い方法を検討できる体制としています。協議会発足のねらいや成果を、2人の担当者にうかがいました。



学校マネジメントコンサルタント
文部科学省
学校業務改善アドバイザー

妹尾昌俊 せのお・まさとし

(株)野村総合研究所を経て、2016年に独立。全国各地の教育委員会、校長等向けに講演・研修等を行っている。中央教育審議会委員。埼玉県、高知県、横浜市等の学校業務改善アドバイザーも務める。

施策概要

市教委が協議会を設置し、事務部会に委嘱

部活動の休養日や学校閉庁日の設定など、働き方改革を進めている長野県塩尻市で注目したい取り組みは、学校事務の改善です。全国に先駆けて、2013年度に全15校の市立小・中学校で給食会計を公会計化しました。各校の事務職員は原則1人、大規模校でも2人であり、学校事務の効率化は働き方改革に必須の観点として、業務改善を進めています。

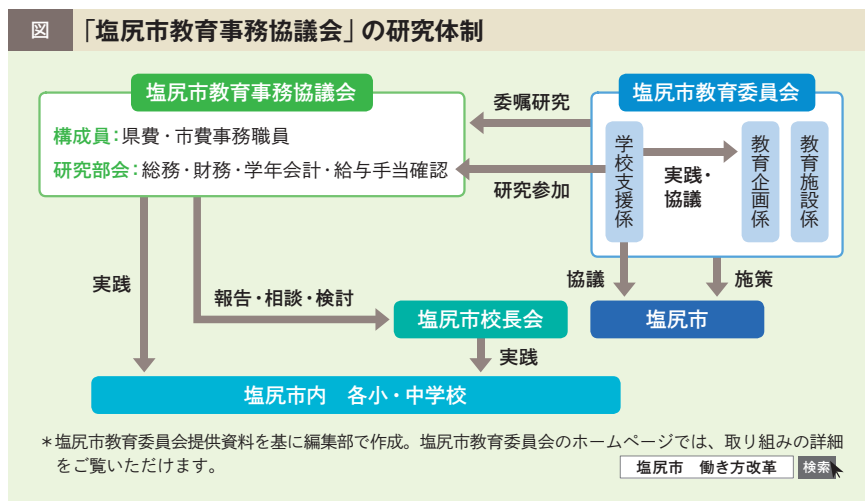
2017年度には、塩尻市教育委員会(以下、市教委)が、市内各校の事務職

員が参加する「塩尻市教育会事務部会」(以下、事務部会)と連携し、現場の声を聞きながら、①業務の簡素化・改善・明確化、②学校分権による業務の迅速化、③教育委員会への業務移管等、④事務職員の学校経営参画強化の4つの視点で改善策を検討。2018年度から、各種申請書類の簡素化、教科書受給にかかわる事務など、新たな予算措置を伴うことなく25の負担軽減策を実施しています。その軽減時間は、1校あたり年間約180時間に上ると

試算しています*。

2019年度に市教委は、業務移管や効率化による負担軽減に加えて、根本的な業務のスリム化を図るため、学校事務の改善を研究する組織「塩尻市教育事務協議会」(以下、協議会)を設置しました(図)。市立小・中学校に近隣の山形村・朝日村の小学校を加えた全17校の事務職員と、市費の事務職員の計23人で構成され、総務・財務・学年会計・給与担当の4つの部会に分かれて研究を進めるとともに、検討・提案事項を市教委や校長会と共有します。

教育委員会の会合の場で事務職員の代表から意見を聞くことは、多くの自治体が行っていますが、塩尻市では、事務職員自身が業務改善を検討し、その改善策を施策として提案・実現させています。現場の課題に沿った実効性の高い施策とすることで、教職員が教育活動に専念できる時間を捻出するとともに、事務職員の学校経営への参画強化を図り、教育活動の質向上を目指しています。



* 塩尻市教育委員会の集計による、市立小・中学校15校の年間の平均時間。

◎改善を全校展開できる体制に

妹尾 協議会を設置したねらいを教えてください。

森村 以前から事務部会で学校事務の改善について検討していましたが、事務部会は任意の組織だったため、事務職員が学校を不在にしてまで集まるのが難しく、また、よいアイデアがあっても1校だけの改善にとどまってしまう場合がありました。

二木 そこで、学校事務の改善をテーマとした研究委嘱の組織として、市教委が協議会を設置し、事務職員が職務としてかわり、改善策を施策化できる環境を整備しました。従来は学校単位や職員個別に行っていた業務を、組織的な業務へと変革させる可能性を探るため、前例・慣例にとらわれずに学校事務を研究する場としています。今年度は、10月末までに4つの部会がそれぞれ4～6回集まりました。

妹尾 実質的には共同学校事務室に近い組織ですね。公的な組織となったことで、どんな利点がありましたか。

森村 市教委との対話の機会が増えたため、市教委と学校それぞれの課題をタイムリーに共有して改善策を考えられるようになりました。また、研究成果を報告する形で校長会に改善策を提案し、協議する場も設けられ、市全体で業務改善を図る体制となりました。事務職員の異動後もシステムが継続できるのも、大きな利点です。

妹尾 実際の運用者が検討に参画することで、具体的で活用しやすい仕組みができ、実効性が高まります。丁寧に検討するほど、仕組みの構築や施策化には時間がかかるかもしれませんが、現場の納得を得ながら進めることが、結果的にやり直しが少なくなり、大きな成果につながります。

二木 そう思います。総務部会が行った出退勤システムの検討では、教職



お話をうかがった方々

(左から)
塩尻市教育事務協議会 副会長
塩尻市立塩尻西小学校 主査
もりむらふみあき
森村文昭

塩尻市教育委員会 こども教育部
教育総務課 学校支援係 主任
ふたつぎよしふみ
二木義文

員が出退勤時刻を記録する手間や、月末の集計に係る教頭の業務負担が課題に上がり、使用者の負担を増やさずに出退勤管理ができるシステムを探しました。その結果、山形村が運用する生体認証システムが有効だと分かり、それを参考にしたシステムを2020年度から運用予定です。

森村 前年度に、ある中学校で生徒の欠席や遅刻の連絡をスマートフォンやパソコンで行えるシステムを導入したところ、保護者からの電話連絡が半減しました。そこで、全校での導入を図りましたが、導入には慎重で、実現していない状況です。そこで、研究部会を、各校の状況を踏まえた原因と対策を検討する場とするとともに、よい実践を普及させる場としても活用していく予定です。

妹尾 保護者の負担を減らすことは、学校が保護者のことを考えているというアピールにもなり、保護者と学校の信頼関係の構築にもつながります。双方にとって利点のある取り組みだと伝えていくことが大切です。

◎慣例にとらわれずに仕事を考える

森村 補助金申請にかかわる事務の

標準化も、財務部会の発案で進めています。申請業務を担当する教頭によって方法が異なっていたため、予算配当や最終確認をする市教委の担当者も大変でした。そこで、業務のフローチャートを作成し、提出書類等の様式を統一して、学校と市教委双方の負担軽減を目指しています。

二木 市教委としては、年度末に集中する補助金申請の確認業務の負担軽減に大きく役立つと期待しています。

妹尾 課題共有を図ることで、教員・事務職員・市教委が Win-Win となる改善が進んでいる好例です。

森村 例えば、教頭が事業企画を立案し、それに関連する会計業務を事務職員が担当するといった分担も考えられます。会計業務は事務職員の得意分野です。慣例にとらわれずに仕事を捉える意識転換が、事務職員にも必要だと感じています。

二木 正確さが求められる事務業務は、将来的にはその多くがシステム化されるでしょう。本市でも2年後に校務支援システムの更新を控え、ICT化が可能な部分は移行させ、教職員が教育の質向上に専念できる環境を整えたいと思います。

KEY POINT 学校事務の効率化に向けた注目点

- 1 事務職員と教育委員会が、双方の課題を共有し、意見を尊重し合う
- 2 事務職員が業務改善にかかわれる体制を整える

Reader's VIEW

2019 Vol.2 へのご意見・ご感想

このコーナーでは、編集部へ寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*『VIEW21』教育委員会版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) でご覧いただけます。

◎「主体的・対話的で深い学び」は、どう授業に取り入れればよいか、理解が広がっていないのが現状です。特集の課題整理にまとめられていた白梅学園大学大学院・無藤隆名誉教授の提言は理解しやすく、毎時間行わなくてもよい、教員の働きかけ方が大事だとする内容に共感しました。また、評価のあり方や指導力向上も、指導と評価の一体化の視点でまとめられていて、参考になりました。(滋賀県)

◎特集の課題整理に書かれていることを一人ひとりの教員に落とし込むことが最も必要だと感じました。本校では、主体的な学びのイメージは共有できていますが、対話的な学びの解釈には違いがあり、深い学びについては研修担当の教員にも曖昧な点があります。今回の特集は大変分かりやすくまとめられていて、指導と評価の一体化についても分かったため、今後の参考にしたいと思いました。(北海道)

◎特集の課題整理で示された『「見方・考え方」とは何か?』の図がとても参考になりました。教科で得た知識を問題解決に使うためには、教員がそうした場面設定を適宜行う必要があります。また、主体的な学びや対話的な学び、深い学びのねらいや内容は、以前から課題に挙がっていることであるため、新しいことを行うというより、教材研究や授業計画の深化が重要なのだと再認識しました。(東京都)

◎特集の秋田県大館市の事例では、ふるさと教育とキャリア教育を関連づけた取り組みを、学校と行政が連携して実施している点が素晴らしかったです。勤務校は、歴史のある地域と新しく開発された地域から成る本市の、新しく開発された地域にあるため、伝統行事がほとんどありません。手探りの中、ふるさとに誇りを持てる教育実践をつくり上げようとしており、「ないから、これから創っていける」という発想の転換で、一歩ずつ進めています。(兵庫県)

◎文部科学省「全国学力・学習状況調査」で注目すべきは、

教科の得点以上に「地域への関心と貢献」という意識だと考えます。特集で秋田県大館市立城西小学校の校長が言われた「子どもにとって、地域の中で活動し、地域に貢献する経験はとても重要です。そうした経験を積み重ねて、地域には自分たちにできることが数多くあるという感覚を育みたい」という考えに同感であり、その感覚が、学力を始めとするすべての生きる力の源になると思います。(島根県)

◎特集の埼玉県戸田市の事例で紹介されていた産官学連携に関心を持ちました。企業で働く人から社会で求められる資質・能力について聞く機会があり、その話は指導主事の説明よりも説得力があるという点に共感しました。私たちもそうした機会を設けて、自らの指導を変えていきたいと思いました。(岐阜県)

◎特集の埼玉県戸田市の事例では、PBLでの授業づくりを「総合的な学習の時間」を中心に行っており、同様の実践が全国にもっと広がるとよいと思いました。「総合的な学習の時間」によって学力向上を図るという面でも、とても重要な取り組みだと思います。(新潟県)

◎連載「わがまちの未来」では、東京都文京区の「選ばれ続ける」自治体を目指して、未来の目標や想定される社会の有様から逆算し、今すべきことを考える「バックキャスト」の教育システムが印象に残りました。これからの社会で生き残るための教育として必要であり、教育行政として大切な視点だと思います。(千葉県)

◎連載「創造的働き方改革のすすめ」では、「カエル会議」の進め方が参考になりました。目標ばかりを高く掲げると、最初から無理だと思ってしまいます。しかし、教育の質を上げる方向性でここまでなら行けるかもと思える目標を設定すれば、意欲も出ます。また、「カエル会議」というネーミングも成果を期待できると感じました。(山口県)

編集後記

連載「わがまちの未来」では、島根県益田市の山本浩章市長取材しました。同市では、「人づくり益田」を掲げ、行政・学校・地域が一体となって社会教育に力を入れて、まちの活性化に取り組まれています。中でも、山本市長自らが「カタリ場」に参加し、地域の大人の1人として中学生と対話をされているなど、自治体の長が積極的に教育の現場にかかわられている姿に、大変感銘を受けました。(西村)

VIEW21 教育委員会版 2019 Vol.3 2019年12月2日発行/通巻19号

発行人 山崎昌樹
 編集人 春名啓紀
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
 ベネッセ教育総合研究所
 印刷製本 研精堂印刷(株)
 編集協力 (有)ペンダコ
 執筆協力 佐藤 智、二宮良太、中丸 満
 撮影協力 荒川 潤、福山 哲
 ヤマグチイキ

◎お問い合わせ先
 フリーダイヤル 0120-350455
 〒700-8686
 岡山市北区南方3-7-17



AI社会でこそ 豊かな言葉が基盤となる

日本教育カウンセラー協会 理事 藤川 章

私は2つの中学校で校長を務めた後に定年退職し、現在、カウンセリング研修の講師として全国を回っています。研修でいつもお話しするのは、「よい言葉がよい人間関係を育む」ということです。生徒と教員、生徒同士、保護者と教員など、どのような立場の人間同士であっても、両者の関係は、言葉を始めとするコミュニケーションがあって構築されるものだからです。肯定的な言葉は相手を元気にして次のコミュニケーションを生みますし、否定的であれば相手を傷つけ、相手に心を閉ざされてしまいます。

ここ数年、AI（人工知能）の発達によって「消える」職業のことがよく話題に上ります。「消えない」職業を見ると、人の心に寄り添う仕事が多く、人を支えるのは人だと改めて感じます。しかし今は、少子化や地域力の低下といった構造変化の影響もあり、社会性が十分に発達せず、その未熟さに起因する問題行動が多発しています。AI社会となるからこそよい人間関係を築くコミュニケーションが重要であり、その基盤を成す言葉を豊かに育みたいと思うのです。

私が言葉の大切さを実感したのは、地域の中でも指導が困難だった初任の中学校での経験があります。生徒指導に明け暮れる中で、指導が難しい生徒の家庭状況が見えてく

ると、将来に希望を抱けない生徒の心の内が理解できるようになりました。その心情に共感した私は、まず生徒の心に寄り添い、彼らの言葉に耳を傾けた上で、自分の思いを伝えるようにしました。カウンセリングでいう、ワネス、ウイネス、アイネス*です。「△△はダメだ」と否定するのではなく、「私は△△について〇〇と思う。きみはどう思う？」と自己開示してから生徒の考えを聞くなど、言葉の使い方に配慮すると、私の言葉が生徒に届くようになりました。

以来、私は生徒により言葉を育むことを意識するようになりました。例えば、事前に用意した50の褒め言葉の中から相手に合う言葉を5つ選び、グループ内で共有する活動を取り入れたところ、相手を好意的に見る視点が育まれ、互いのよさを認め合う関係を築ききっかけになりました。

今後は、かつてのような身体的な暴力よりも、ネットなど見えにくい世界での言葉の暴力がさらに増えていくかもしれません。自分にも相手にも肯定的な感情を持てるような言葉を育む教育が、言葉の暴力を抑え、いじめの抑止にもつながっていくのではないのでしょうか。

*カウンセリング技法の1つである「One-ness」「We-ness」「I-ness」のこと。相手の気持ちに寄り添い、その上で自己開示や自己主張をすることが大切とされる。

ふじかわ・あきら

民間企業勤務を経て、東京都公立中学校教諭に。並行して、東京都教育研究所(当時)の研修生として筑波大学大学院で國分康孝教授から、育てるカウンセリングや構成的グループ・エンカウンターを学ぶ。2010年、日本カウンセリング学会記念賞受賞。2校の中学校校長を歴任。

NEXT>>>

会津大学 文化研究センター長
荻間澤 勇人 教授